

解説
(米沢古文書研究会)

総 そう

紙 ひ

のぞきよしまさ
荏戸善政

これは、米沢図書館（林泉文庫）所蔵の「総紙（そうひ）」写本の解説である。

「総紙」は、寛政三年、荏戸善政が中老として復職し、米沢藩の藩政改革にあたり改革の重要項目を分析検討した、藩政改革短長期スキームである。この写本には、明治三年の書き込みがあるが、写本の成立時期は定かでない。上杉文書（827）にも上下二冊になった総紙の写本がある（上杉博物館蔵）。

「総紙」のタイトル名は孔子家語・好生の中にある「夫為組者、総紙於此、成文於彼」から取った題名である。「夫れ組を為る者は、紙（ひ・くみひも）を此に於て総（す）べ、文（あや）を彼に於て成す」（二〇一七年早稲田大学文学部入試問題参照）と読むようで、意味は「組み紐を作るのは、手元で紐を編むが、全体の模様は紐の先のほうにあらわれる。つまり近いところの細かな仕事を積み重ねることで、先のほうに大きな成果が現れるものだ」ということらしい。「総紙」に記載された各種の改革事項と全体としての藩政改革の関係を示すタイトルなのだろう。

この解説は、図書館サポーターの活動として行ったもので、山王堂初雄の指導のもとに高橋育子、高橋敬一、中村善治の米沢古文書研究会会員が解説した。判読不能の箇所は■としている。

凡例

- 1 本解説は林泉文庫版総紙写本をもとにして行い、上杉文書版総紙との異同は検討していない。
- 2 変体仮名は平仮名に、カタカナはカタカナ、助詞の者(は)、江(え)、而(て)はそのまま漢字で、茂(も)、与(と)は平仮名に解説している。
- 3 原文のタイトルの次に、棒線で区別した中に、当該項目の簡単な内容を記載し、項目毎の末尾に註記を記載しているが、記載内容は解説者の主観である。
- 4 原本(写本)で朱書になっている部分は「朱書」の注をつけてある。
- 5 「付札」とあるのは、そもそもの原本では付箋として註記されていたと思われるものを写本する際に「付札」と註記して本文内に四角枠で囲み記事にしているもので、写本同様に枠囲みで解説している。
- 6 冒頭の莅戸善政に関する説明は解説者が書いたものである。

荻戸善政は、享保二十年（一七三五）米沢の元馬口旁町（現在の山形大学工学部敷地内）に誕生、初めは九郎兵衛、後に六郎兵衛、号を太華と称し、荻戸太華とも呼ばれる。荻戸家は米沢藩の中級家臣の馬廻組で、父は早く死去し、寛延四（一七九二）年、祖父の家督を継ぎ、中ノ間組として百八十石を与えられた。

明和四（一七六七）年四月、藩主の上杉重定が隠居し上杉治憲（鷹山）が藩主となり、善政は同年小姓、同六（一七六九）年町奉行職、安永元（一七七二）年小姓頭となった。天明二（一七八二）年奉行竹俣綱が失脚し、天明三（一七八三）年善政も隠居、治憲も天明五（一七八五）年に隠居、藩政改革は停滞したが、寛政三（一七九二）年、善政が中老職として復帰し、「寛三の改革」が始まった。善政は寛政六（一七九四）年家臣筆頭職の奉行職となり米沢藩家臣の最高位となり藩政改革を実行した。

善政は、享和三（一八〇三）年六十九歳で死去し、長泉寺に葬られている。

総紀

夫為組者総紀於此成文於彼

御下国之上可奉伺草案目録

○ 鋸箒

○ 頭々諸奉行諸役頭召出サレテノ御意御手扣

○ 救窮

○ 七恵

○ 軍用金備

孝子并奇特ノモノ象魏ニ掛ル

○ 諸御附横目并定横目御除附諸役場ヘノ達書

○ 諸役場半之日定

簡政并政令無遅々之策

○ 諸士之子弟土著

○ 諸品御国産ヲ用

○ 御仕成半分之命令案

○ 御方々様ヘ万事御仕切通ト仰進セラル

○鉄砲星場一箇所并鉄砲事数条附上覽御仕成

○縦免出米

○穀物駄送他邦出策文

○商船松川出入御免

○藏々不私升

江戸米沢之便諸組交替ヲ以定日ヲ立

川々漁一過停并翌年一過他邦入鮮魚停

○禁百姓奉公於町家

○停赤湯鍋

○樹芸

以上二十三ヶ条初冊

○無給勤御除

○禁恣奉加

○為四民立代参

○堰堤道橋寺普請之願鍬拝借并夫食代拝

借寺之願定日ヲ以願出サシムルコト

○再置郷村出役

○肝煎長百姓組頭免許 (朱書) 寛政三年八月廿一日達

○収納定日而貢 (朱書) 右同断

郷村御取立物口々取合方評判達書之案

○馬ヲ附益ス策文

○正反物丈尺 (朱書) 寛政三年十一月廿一日触

○減町役夫 (朱書) 寛政三年四月十一日達

○御兵具錢借渡武器用意ニ限ル (朱書) 寛政三年六月三日達

改代官所之制

金銀出入一円帳之新組

○赤湯馬市禁旅馬 (朱書) 寛政三年八月十七日達

○馬子附益シ (朱書) 寛政三年八月十七日達

○博奕改革刑

○七恵之一歩

○鉄砲触并上覧矩ともに追廻馬場西星場ニ定ラルル留

○諸駅場掛札 (朱書) 寛政四年十一月達

○赤湯馬市ヲ御城下馬口旁町へ移 (朱書) 寛政七年十二月達し

(朱書) 八年七月を移

○ 蛸笥 詢于葛藟

上書箱（目安箱）のこと、開封日など詳しく定める事としている、姓名明らかでない投書は焼き捨てとなっている。

△此ヶ条寛政三年三月十五日御取行

何月何日

郡奉行中

町奉行中

郡割所

衆人の異見被為聞候ため、今度 御城追手前御政事所脇
江上書箱被相掛候間、不依誰人恐多くも 御上御身廻り
より御政事の上其外何事ニよらす心付あらんものハ印府
書面にして上書箱ニ入申上候様被 仰出候事

但小印なく姓名慥ならさるハ取上なく焼捨ニ被 仰付候間、
百姓町人ならハ所付いたし誰下誰組誰と認小印つきニして

申上へし、又者ならハ何組誰内誰と認へく候

一 右上書月々朔日十五日御開符之筈ニ候事

右之通被仰出候間、無遠慮申上候様百姓町人共へ懇ニ可被申含候

諸士頭々江

衆庶之異見被為聞候ため別紙之通被 仰出候間、召仕候家来共

江懇ニ可被申付候、各諸士の分ハ支配頭・組頭を以差上候様去年

中被 仰付置候へハ、弥其心得可有之候、彼是支配下江可有伝達候

○ 郡奉行等へ被相達候書面云々御開符之筈候事と云迄を写して

別紙として差添

役所

今度追手前御政事所脇江上書箱被相掛候、以来月々朔日

十五日御開符之事ニ候間、朝五ツ時同心召連はづさせ、御在国にハ

御本丸奉行詰之間、御留守年ニ八月番奉行所へ可差出候

○ 此日より上書箱掛之

○ 月々朔日・十五日朝五ツ時役所役一人、同心同道、上書箱はつし御

本丸奉行詰之間へ差出、御留守年二八月番奉行宅へ差出、箱相渡候へハ又々掛之

○上書箱掛はつしの鑑

ハ役所あつかり

○上書箱の鑑八月番奉行

御用箱入

○御前ニおひて奉行中開符

差上之御覽、畢て奉行中

披見のため被成御下披見

畢而又々御手元へ差上つまり御書院御幣蔵入

○明治三年

六月廿五日從



前上書箱を目安箱ト御書替右へ御掲札左之通○松板八分丈一尺巾三尺山一寸今般御一新ニ付而ハ下情

上通万民安堵各生業ヲ安んし候ため目安箱差出候間民情鬱塞無之様何事ニヨラス心付次第忌諱ヲ憚ラス封書ニ致シ此内へ

可入者也

明治三庚午年六月藩庁

(訳註①) 鋸箒(こうとう)は一度入れたら出すことのできない入れ物

(訳註②) 詢于蕝薳(すうぎようにはかる)は、詩経・大雅にある。蕝は草刈り人、薳(ぎよう、又は、じよう)は薪取り人、庶民の意見も取り入れること

頭々諸奉行諸役頭召出サレテノ御意御手扣

嗚呼乃一徳一心立定厥功

米沢藩幹部に対し鷹山の考え方(御意)を訓示した、藩の役職の選任については頭々の書上(上申)や入札(投票)で選んでいるが、能力を見極めて選ぶよう指示している。

(朱書)

寛政三年六月一日出仕居残被 仰付、其列々方一人宛

御前へ被召出被 仰含、此御手扣豊前渡之

頭々

御家中の存寄書被成御覽、御国躰をも明かに知しめし御頼母敷御満悦 思召候、只御残念ニ 思召候ハ御藏元の御窮迫よりおのつから御政事も不行届、御家中をはしめ四民の哀沙汰の限ニ相聞 国の守ニ被為立候御甲斐のなき甚御残念ニ 思召候、只此上ハ君臣一体の忠誠ニ無之てハ四民を御安んし目出度御栄の基ハ立ましき事と 思召つめ候ニ付、猶又諸士の忠誠を御頼 思召との御事候、此段ハ呉々組中支配のもの共へ申聞置候様ニとの 御意ニ候

一上の御行廻り御窮迫とハ申なから諸士の存寄をも御斟酌之上、御用掛被 仰付取量候へハ、何歟乙々く御取凌ニも可成候、只御家中之事古風ニ立帰り各別の儉約を用永御奉公いたし候様ニとの御事ニ候 此段も懇ニ申含候様ニとの 御意ニ候

一組子の身の上ハ其頭々ニ御まかせ置るゝ事ニ候得者、孝悌の物数文学弓馬の修練より行跡のつつしミ家事の行廻までも

親しく心遣し取そたて遂へき事ニ候所、是までハ事々世上を
はゝかり同役をかへりミ当らす障らすの扱ニ打過候も相聞、
頭として組子を扱ふ甲斐なく候ニ付、向後ハあつかる甲斐あつて
前後左右を不見合御扱の組子ハ斯ふこそ扱ふへけれど心
一盃器量一盃の忠誠を尽し取そたて候様被遊御任との御事候、
此段ハ頭役勤るもの共へ能申含置候様ニとの 御意ニ候

一 惣而役義被 仰付候節頭々書上入札被 仰付事ニ候、重役ハいふニ及
ハず軽き役柄とても一役を預るものハ皆御治国の御相手なる故
大事の御撰ニ候、若心得疎なる者ニ被 仰付候時ハ其ものゝ量方
大ニ四民をそこなひ御国政をあやまつニ至候へハ、御国の盛衰
安危も只人の御撰ニ止り候ゆへ其御撰甚御大事ニ候、依之向後ハ
其支配其組子のものへ行廻能心つけ置人柄を能見ためし置て
可申上候、又其役ニよつて此役ニハ任たれとも彼役ニハ任さるといふ人も
有之候へハ、旁心を用て可申上候、尤年功勤勞を以其御沙汰有之事
亦勿論之事ニ候へハ、年功勤勞を以可申上ハ其旨を書添て申上候様
ニとの 御意ニ候

但此迄勤書委敷書記来候所、頭々此度の思召を能心得書上候
上ハ、巨細の書付ニモ及ハす名前年付知行はかり書付ても苦し
からず、尤其内可認筋あるハ各別との 御意ニ候

一 衰候御家中といへとも餘の事と違ひ御猶予被遊まじき 思召
より何そのための備金被 仰出思召ニ候至治の御代何の御筆遣
も無之事ニハ候へとも、万一御勢遣様の事ニても被蒙 仰候日面々手
薄事の有之候而ハ無本意事ニ被 思召塵つんで後年の備にもと
纔つゝの備可被 仰付との御事候、此段ハ頭々たけに被成御意候迄
一統の事ハ別ニ可被 仰出との御意ニ候

御仲之間通

諸奉行衆

(朱書) 此物頭二人ハ御書院へ被召出 頭取役場勤

物頭衆

諸役頭衆

御代官衆

御家中の存寄書被成御覧、御国体をも明に知しめし御頼母しく御満悦 思召候、四民安く 御国の目出たき御栄ハ弥以君臣一体諸士の忠誠ニ止ると 思召猶又諸士忠誠の勤を御頼 思召候、殊諸役場の司頭として御用取量候ものの上ハ四民の苦楽御国用の不足のかゝる所につき、心一盃器量一盃の忠誠を尽し勤候様被遊御任との 御意ニ候

付札

先達而も被 仰含候通、四民の安く 御家の目出たき御栄ハ只々君臣一体の忠誠ニ止ると 思召候、殊諸役場の司頭として云々

(訳註①) 「嗚呼乃一徳一心立定厥功」は書経・泰誓にある。嗚呼、なんじ一徳一心、そ

の功を立定し、これ克く世を永くせよ」という。一徳一心は、家臣は君主と心を同じくして奮闘せよとの意。

救窮

- 周急不継富
- 損上益下
- 未見其子富而父母貧者也
- 下貧則上貧下富則上富故田野県鄙者財之本也垣窳倉粟者財之末也百姓時和事業得叙者貨之源也

百姓・家臣などの困窮対策、生育金貸付は通常どおり返済，年貢未進の取立猶予、儉約な
ど様々対策案が考えられている

百姓

（朱書）寛政三年六月三日相触之

郡奉行中

一百姓共近年甚衰候由、仍拝借米金銭七ヶ年御取立用捨

午之年々末五十年賦御取立被 仰出候事

但困粃拝借之事ハ己々か後年の備二候間御沙汰の外二候

但囲糴并生育金の事ハ御沙汰の外ニ候

此通調直し申度存候、此生育金御借付之事ハ後年出生

御手当御備のため中殿様御代起地の出物を片向て御借付

被遊候拝借金ニ御座候所、至に今候而ハ年々六十両位ツ、利息罷出候事

の様ニ一円帳ニ相見へ候へハ、是をハ是迄之通差置候て十五以下五人子共

を持候者五人目出生の初御手当として金壹両ツ、被成下候様ニ取量

申度存候、左候へハ年六十人江の御手当ニハ行渡申候、扱五人の子持候者六

十人ニあまり申ものか、左候ハ、式歩ツ、の御手当ニて百式十人へ行

渡申候、扱又夫にてハ不足ニ御座候時ハ三四年借返し借返し候時ハ

凡百金計ツ、の利息ニも罷成ニ付、其時ハ相応の行渡ニも罷成

様ニ存候、仍此生育金の年延ハ御沙汰之外ニ仕度存候

一 御年貢未進五ヶ年御取立御用捨、辰の年より未三十年賦御

取立被 仰出候事

一 御窮迫の此節右之通被成下候上ハ、此末並々の事ニハ拝借御手当等不被成下候間、兼而存其旨夜白家業ニ力を尽し公私の納方滞なき様致へく候事

一金銀米錢の差引ハ人の不足を助候道にて是を借り候ものハ是かために今日の難義を凌、是を貸し候ものハ其利息を以又多の人の難義を救候へハ、借り候ものハ恩義の辱をわすれず信義を守り返済無滞様可存候、為其拝借物御取立御用捨被 仰付候ニ付此分を以他借へ返済信義を立へく候、未進御取立御用捨を以当日のたりわひにいたし永く百姓ニ立行へく候、貸し置候金銀主も窮民救の慈悲を以手当の取

立尤の事に思召候事

一 百姓の着物鼠色浅黄色之外用ましき由被 仰出候へ共

斯まで窮し果候末泥にも可有之との御沙汰にて紺色をも今度御免ニ候、諸色御停止之事ハ身分を知り奢を戒候ための厚き思召ニ候間つゝれをまとひさしわたを着る身分を知り

白糸を以つゝれにさし是を目印に着し候ハ、諸色といへとも着候様被 仰出候事

一 百姓とも是よりハ猶以夜白家業ニ暇なくつとむへく候へ者
年中の辛勞を解候ため肝煎長百姓等かゆるし候ハ、輕キ
催に盆遊の踊なとハ老もわかきもたのしかるへきとの御
沙汰ニ候事

右之通被 仰出候間能々申含目出たく立行候様可被致候

(朱書) 寛政三年六月三日相触之

御家中

御家中の諸士累年御借上のつかれに甚衰候由、仍御借上之内
少々つつも御返被成下度 思召候へとも各承知之通之御窮迫
其御沙汰ニも難被為在 御残念思召候、去なから少々も四年を
かさゝれす候時ハ末々立行御奉公のほとも無覺束せめてハ難
義のもののため拝借米金錢五ヶ年御取立御用捨、辰の年

方未三十年賦御取立被 仰出候事 但御兵具錢之事ハ御沙汰之外ニ候
一 田畑年貢済後二ヶ年御取立御用捨、丑の年より末十年賦御取

立被 仰出候事

一 御窮迫之此節右之通被 仰出候上ハ此末古来相定拝借之外

並々之事ニハ拝借御手当等不被成下候間、兼而其旨可被相心得候事

一金銀米錢の差引ハ人の不足を助候道ニて、是をかり候者ハ是か

ために今日の難義を凌、是を貸し候ものハ其利息を以又多

の人の難義を救候へハ借り候ものハ恩義をおもひ信義を守る

へく候、為其五ヶ年拝借物御取立御用捨被 仰付候間、此分

を以他借へ返済信義を立へく候、貸置候金銀主も頼も

しき志を以不泥様の熟談勿論の事ニ 思召候事

附百姓町人衰候付上よりも拝借米金錢七ヶ年御取立御

用捨、其末五十年賦年貢未進五ヶ年御取立御用捨、其末

三十年賦等御手当をも被 仰出候、斯るほとこの事ニ候へハ下々の

者へ手当として貸置候ものハ 君家のため当年一過取立用捨

其末不泥様取立遂候義尤の事ニ 思召候

右之通被 仰出候間支配下組中へ懇ニ可被相達候事

（朱書） 寛政三年六月三日相触之

町人

町奉行中

一 三民のつかれに町家甚衰候由、仍町奉行所借付の日市金七ヶ
年御取立御用捨、午の年々末五十年賦取立ニ被 仰出候事

但義倉米錢借付も有之候得共、己々か後年の備ニ候間

御沙汰の外ニ候

一 諸役錢諸運上未進五ヶ年御取立御用捨、辰の年々末三

十年賦御取立被 仰出候事

一 此節右之通被成下候上ハ此末並々之事ニハ拝借御手当等不被
成下候間兼而存其旨家業ニ力を尽へく候事

一金銀米錢の差引ハ人の不足を助候道ニて是をかり候ものハ是
かために今日の難義を凌、是を借し候ものハ其利息を以又
多の人の難義を救候へハ、借り候ものハ恩義の辱をわすれず
信義を守り返済無滞様可致候、為其拝借御取立御用捨
被 仰付候ニ付此分を以他借へ返済信義を相立へく候、末
進御取立御用捨を以当日のたりわひにいたし永く家業ニ
立行へく候、貸置候金銀主も貧民救の慈悲を以手当の

取立尤の事ニ 思召候事

一町家のものはよりハ猶以夜白家業に暇なくつとめへく候へ八年中

の辛勞を解候ため検断組頭等かゆるし候ハ、輕き催に盆遊
の踊などハ老もわかきもたのしかるへきとの御沙汰ニ候事

一町家に屋敷所持致候諸士職人の類故あつて是迄町役御

免のもの有之候、町内のごしミ救のため向後五ヶ一の役ハ手伝

候様被 仰出候、此段ハ其町検断より懇ニ可相頼候事

右之通被 仰出候間能々申含目出たく立行候様可被致候

(訳註①) 「周急不継富」 論語の言葉、急なるを周(あまね)くして富めるに継がず、君子

は困っている人を助けるが富める者をさらに富ますことはしないとの意味。「損上益下」易

經の言葉、上を損して下を益す。「未見其子富而父母貧者也」孔子家語・賢君篇に孔子が詩

經からの引用として「愷悌君子、民之父母。未有子富而父母貧者也」とある。「下貧則上貧

下富則上富故田野鄙者財之本也垣窶倉稟者財之末也百姓時和事業得叙者貨之源也」荀子・

富国篇、下貧しなければ則ち上貧しく、下富めば則ち上富む、故に田野県鄙は財の本なり、垣

窮（えんぼう）倉稟（そうりん）は財の末なり、百姓時（こ）れ和し、事業叙を得るは貨の源なり、（民が和合し秩序ある事業が財貨の源泉との意味）。

七恵 上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤而民不

倍

七恵（意味不明確、さまざまな福祉施策のこと？）の具体策案

諸士

覚 （朱書） 此ヶ条寛政四年十一月十日御下知江戸方達同廿八日発ス

歳九十に至らん長寿のものへ其生涯老人御扶持可被下候、召仕

男女之内ニあるも同断之事

右之通被 仰出候間、九十以上の者来ル何日まで可被書出候、向後ハ正月

十一日御扶持頂戴申渡候間、其年九十の者同月七日例として役所へ可被

書出候

但寿終事も其時々可被相届候

年号 月日

(朱書) ○九十以上へ被下預札へハ印として寿の字書添候様役所へ相達ス

(朱書) ○九十年のもの諸士ハ絹の御時服被下成候所御扶持被下といへとも時服も初年ハ是迄之通被下筈ニ候事

在郷

覚

(朱書) 此ヶ条寛政四年十一月廿八日発ス十一月十日御下知ニよつて也但文言取捨あり

一年老たるものをハ心を用ひ力を尽して大事に取扱へき事也、仍

七十以上のものあらんにハ其家に当る村役の内を用捨するとか

何れ村方申合助力して遣るへし、九十以上に至てハ申合衣食

の心遣をもなしやるへし、九十以上のものへハ老人御扶持を可被下候

但村役の内を用捨せられハ互の事とハいひなから夫たけ残ものゝ

背に負太義をかくれハ生産相応ニも暮さんものの用捨を辞

し断らん事其義理勿論の事也

(朱書) 此ヶ条右同断

一 幼稚のものハ母のいつくしみにあらされハ成長を得かたし、仍十五歳以下子四人五人持たらんものへハ村役の内を用捨するとか何れ村方申合其母へ相應の助力して遣るへし、五人持たらんものへハ末子八歳迄其母へ半人御扶持可被下候

御沙汰之上二人御扶持ニナル

但右同断

一 子死して外に養ハるへき親類もなき老人、父母死して育ハるへき親類もなき幼稚のものあらハ其村方申合誰か所にか倚らせ懇に養つて遣るへし、是をかくまふものにハ村方申合其相應ニ助力して遣るへし、多人数ニて村方の助力届かたきに至てハ代官所ニ達して差図を受へし

一片輪ものにて身過の成かたきものあらハ夫か相應ならん身過を考てさすへし、とても身過の叶かたきものあらハ代官所に達して差図を受へし

(朱書) 此ヶ条寛政四年十一月十日御下知あり同月廿八日発ス但文談取捨あり

一 妻もたん年齢に至て妻なく、夫あらん年はへに夫なき

ものあらんにハ村方心遣し媒して匹偶をさすへし

但其父田畠少きとか、又ハ家内夫婦多ニて贅を取嫁を取

んことの成かたきものあらんにハ、遠近在割地等の内を渡とか

或荒所開発をなさしめて別家とすへき仕方もあるへし、斯る

ものあらんにハ代官所ニ達して差図を受へし

付
札

はへに夫なきものあらんにハ両親の心遣ハ言に及ハす村役
の者村方の者共常に心を配置中立世話して匹偶をさす
へし、向後ハ男子十七女子十四二たにならハめとらせよめらす
へし

但書本文之通

嫁娶年齢定の事伺之通御下知有之ハ本文此通ニ書直へし

尤此通只々触流し候而ハ不行屈事ニ付而、村方高付帳ニ家内
人頭為書出置、其年齢の者書拔置、代官所方催促心遣も可有之
又年齢過て媒人なく匹偶せざるあらハ其訳書出させ候て広く
他の村への世話など達し心遣もあるへき事なり

一其村に仮令ならぬ病氣のものあらハ村方申合間尋て看病取扱の世話をなし遣るへし、其家極貧にて病人の衣食療養行届かたからんものあらハ、互の事なれハ、申合助力して遣るへし

一旅行のつらきハ誰ニもおもひやらるる事なり、然らハ旅人を宿せるものハ諸事に心を尽し丁寧に扱て旅人の心を安んすへし、旅人若病氣の事あらん時ハ医療取扱の事猶念を入へ

し、若宿からん旅籠錢なく食すへき便なからんものの流浪せる又ハ斯る躰のもの病氣なとあらんにハ、其所に留置早々代官所に達して差図を受へし

右之通被 仰出候間、無遺忘可用心也

年号

月日

町家

覚

(朱書)

此ヶ条寛政四年十一月十日御下知あり同月廿八日發ス但文談取捨あり

一年老たる者をハ心を用ひ力を尽して大事ニ取扱へき事也、仍

七十以上のものあらんにハ其家に當る町役の内を用捨するとか
何れ其町申合助力して遣るへし、九十以上に至てハ申合衣食の
心遣をもなし遣るへし、九十以上のものへハ一人御扶持を可被下候

但町役の内を用捨せられハ互の事とハいひなから夫たけ残

るものの背に負せ太義をかくれハ生産相応にも暮さん者

の用捨を辞し断ん事其義理勿論の事なり

(朱書)

此ヶ条右同断

一幼稚のものハ母のいくしみにあらされハ成長を得かたし、仍十五歳

以下子四人五人持たらんものへハ町役の内を用捨するとか何れ其町

申合其母へ相応の助力して遣るへし、五人持たらんものへハ其

母へ半人御扶持可被下候

但右同断

一子死して外に養ハるへき親類もなき老人、父母死して育ハるへき親類もなき幼稚のものあらハ、其町申合誰か所にか倚らせ懇ニ養つて遣るへし、是をかくまふものにハ其町申合其相応ニ助力して遣るへし、多人数ニて其町の助力届かたきに至てハ町奉行所に達して差図を受へし

一片輪ものニテ身過の成かたきものあらハ夫か相応ならん身過を考てさすへし、とても身過の叶かたきものあらハ町奉行所ニ達して差図を受へし

(朱書) 此ヶ条寛政四年十一月十日御下知あり同月廿八日発ス但文談取捨あり

一妻もたん年齢に至て妻なく、夫あらん年はへに夫なきものあらんにハ其町心遣し媒して匹偶をさすへし

但其父小商人或貧窮又ハ家内夫婦多ニて簪を取姫を取

んことの成かたきものあらんに、其町并諸町検断組頭などの相談熟さハ、此所の明店彼処の明屋又ハ誰某か名子借などといふことく、よくもあしくも其生涯を送へき家業につかし

むる仕方もあるへし、斯るものあらんにハ町奉行所ニ達して差図を受へし

一其町に仮令ならぬ病氣のものあらハ其町申合問尋て看病取扱の世話をなし遣るへし、其家極貧ニて病人の衣食療養行届かたからんものあらハ互の事なれハ申合助力して遣るへし

一旅行のつらきハ誰々もおもひやらるる事也、然らハ旅人を宿せるものハ諸事に心を尽し丁寧に扱て旅人の心を安んすへし、旅人若病氣の事あらん時ハ医療取扱の事猶念を入へし、若宿からん旅籠錢なく食すへき便なからんものの流浪せるあらんにハ往来宿へ送とけ扱其由を町奉行所へ届へし

附往来宿のもの兼而被 仰付置候通旅人懇ニ取扱、旅籠錢なきほとものあらハ其旨早速町奉行所へ達し、路銀をあたひ勝手の口より送を付て遣るへき事

右之通被 仰出候間無遺忘可用心也

年号

月日

○七恵御用掛兼而可被 仰付置役柄

○郡割所ノことハ九十以上書上取計はかりニ付、諸士門屋借町方名子借共ニ主人主人ヲ書出させん方ニ被 仰付候ハ郡割所御用懸ニハ及まじき哉、郡割所量を以役ニ被召仕候諸門屋并名子借之義ハ元より十五才以下六十二才以上ニハ役御免ニて相除来候由ニ付、御惠急度行届居申候、假令病氣片輪もの等有之共主人主人の世話中のものニ付改たる七恵の被 仰出ニも及ましきか、然時ハ九十以上の書出し計の事ニ御座候

○御蔵役人御用懸の事ハ預切出量有之ニ付、尤

何所蔵とか定置れ候方可然か

○郡奉行衆町奉行衆方申達書

六人手寄衆

郡奉行衆

町奉行衆

役所役人筆頭式人

代官 筆頭式人

郡割所役方

御蔵役人



此度の被 仰出誠以難有御義ニ候へハ、其村其町能々心を合奉安君慮候
様懇ニ遂評判末々無遺忘様可申合候

一其村其町九十以上之者来ル何日迄以書付可申出候

但向後ハ正月十一日御扶持被成下候間、其年九十の者同月七日可書出候
一向後書出之書法

豎紙

九十歳之者奉書上候事

一九十歳

何村何町 誰父

名

一九十歳

何村何町 誰母

母

右之者当エト九十歳罷成候ニ付奉書上候以上

年号月日

何村肝煎

・
・
・
・

何町肝煎

・
・
・
・

御代官所

御町奉行所

一 右九十以上のもの相果候ハ、其時々可届出事

一 十五才以下子五人持たるもの来月何日迄可書出候

但向後ハ五人目出生の砌早速可書出候末子八歳迄可被下候

一 右向後書出書法

十五才以下子五人持候者奉書上候事

一 子五人内 十五男 十三女 十一男

何村

八男 当歳男

何町 誰

妻

右当歳之子去ル何日出生仕当時五人養育仕候付奉書上候、以上

年号月日

何村肝煎

・
・
・
・

何町検断

・
・
・
・

御代官所

御町奉行所

一 右被 仰出ニ付可受差図ヶ条ハ其時々可伺出候

月日

○御用懸之面々心得可罷在ヶ条左之通

一七恵二付被成下御扶持米之儀ハ、何村誰九十以上一人御扶持三俵二斗二升五合と云御蔵預札を以可被下候、尤預札通用ハ常の通同然

一助力の員数伺出候ハ、村方頼母敷助力之事ニ候へ者、上は何程と員数ハ不被 仰出候、村の大小役銭の多少も可有之事ニ候へハ、其相応も可有之老に至るハ互の事村方懇ニ遂評判能きに其員数をハ可定置候、尤助力の員数相定候ハ、追而可届出由御差図いたすへし

一養ハるへき親類のなき老人幼少村方助力にて扱手あまるよし
の訟あらん時、十三才以上の男女ならハ米二俵を添て御家中奉
公ニ御渡、十二歳以下ならハ玄米三俵半俵預札にて被下て其村へ
御渡なるといふ事も可然、尤此もの十三に至らハ前文之通ニして御
家中奉公ニ御渡前之通

一片輪ものとても見過の成かたきといふもの諸あらん時、尤年頃

二もよるへけれども、御台所御廐蠟藏等の火たき又ハ作事屋の火の番諸役所諸役場の番人等ニ被召仕などいふ仕方などもあるへし、女ならハ御奥向の火たきなどに被召仕といふ仕方もあるへし、夫にも成かたきものあらハ三俵半俵被下て村方へ御渡などいふ事ニもあらん

一 夫婦匹偶せしめて別家ニ立度との訟あらん時、兼而御郡中

荒地或村割地等書出させ置此地をわたせ居家ハ双親の心遣にて

両村の手伝にて作れ、三年の間ハ二人扶持被下て扱農具ハ一通被下にて常の開発ハ三年の無年貢なれども、新家村ニ御立被下候事故五年の無年貢ニして被下などといふ様なる事にもあらんか、巧者のものの分別にハ又外ニ能仕方もあらんか

一 御城下町往来宿ハ前々被下物あり病人取扱入料旅籠なし

旅人宿したるにも被下候、扱在々の往来宿ハ上り被 仰付てするにもあらず、村方切にて立置候ものと相見候、尤入料も村方惣割と見候、右之通ニ候へハ扱もおのつから疎意にて只宿屋の利潤のためをのミ致筈ニ候、仍往来宿一人へ無代賄いたすためとて玄米二俵ツ、被下

此外ニ無抛入料のかかるへきをハ是迄の通惣村割ニて肝煎の
量たるへきよし被 仰付、扱又御城下往来宿へ掛候掛札定書

之通ニして宿屋の軒ニ掛へし、左候へハ旅籠木賃の定も御城下同様
年々伺候而代官所小印つきにして張置候様致度事ニ候、右往来宿
是迄の場所左之通

□板谷□大沢△綱木○関○上小松

○松原○手子☆白子沢☆沼沢☆市野々

○小国☆玉川○糠野目□大橋○赤湯

□川樋□掛入石中山○宮○小出□鮎貝

□石那田□小瀧□荻中山

ベ二十五軒 但能ほとに立候ハ、此内を減しても可然煩しからず

少くハ致度事なり

右へ二俵ツ、被下候へハ取合五十俵ニて御達候、是も往来宿賄米之
預札ニて御渡可然候

一 右圈角合印左之通

○往来宿立置二貫三貫或四貫文くれ外余計入料惣村入料之印

△旅籠屋四人有之故此四人にて宿いたし数日逗留のものハ四人二而二

泊リニ廻宿いたし余計入料ハ一村割の印

□往来宿不立置村方廻リニ宿いたし入料一村割の印

☆往来宿とてハ無之兼て背負商人宿いたすと有之印尤無代

又ハ病旅人有之節一村割の印

○御城下往来宿ハ六町廻リ好ものへ申渡て勤る事ニ御座候、万事不届

又ハ疑敷事も有之、殊ニ往来宿へ着候ものハ無頼のもの共ニ付扱か

ぬる事有之旁以来ハ大町判所近隣へ定宿にして諸事判所

懸リニ致置度候、委細ハ略之

(訳註①) 「上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤而民不倍」大学の言葉、「上(かみ)老を老として民(たみ)孝に興(おこ)り、上(かみ)長(ちよう)を長として民(たみ)弟に興(おこ)り、上(かみ)孤(こ)を恤(あわ)れみて民(たみ)倍(そむ)かず」で、君主が老人を敬えば民衆も感化され孝となり、上が年長者を敬えば民も従順になり、上が孤児をあわれめば民もそむかなくなる、との意味。

軍用金備

一年間で百三十四両ずつの軍用金備え

(朱書)

○軍用金御備之事武具修理料三両拝借十二年賦済之分年ニ二百両ツ、有之候間
是を上御軍用金ニ引除相備候様御金蔵へ申渡、寛政六年より備初候事
但御家中の備ハ追而時を以可相達事

覚

衰候御家中といへとも、何その時面々手薄き事の有是候てハ無本
意事ニ被 思召、年々残知百石ニ付錢五貫文つゝの備いたし候様
被 仰出候事

但金ニ直し頭々の印符を以年々御金蔵へ可被相備候、尤

上におゐても御備の筈ニ候

○上の御備八年ニ七百五十貫也金ニシテ百三十四両ツ、也

(朱書)

○右寛政六年備初候軍用金御金藏ニ備置候而ハ一円御払方御差支の節引倒既
三ヶ年分引倒候て御備の甲斐無之ニ付、酒井左衛門尉殿御家来酒田住居
本間四郎三郎へ預くれ候様我等方以書面頼候所領承ニ付、寛政九年六月酒田
御払米代の内方三百両相頼候所、則本間正五郎預証文へ一類本間久三郎
同信十郎同信次郎連印の証文一通有之、此一通ハ御勘定所との宛ニ候故
御金藏へ納置候事

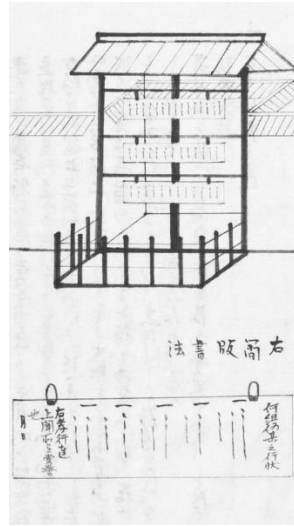
但来午年方戌年まで年々三百両ツ、亥年より末ハ永く年々年ニ
二百両ツ、頼候筈の申合ニ候事

孝子并奇特ノモノ象魏ニ掛ル

孝行のもの奇特のものを高札に掲げて表彰

孝子并奇特のものの御賞誉あらハ広く四民へ示知らせたき事に
存候、罰といへハ既町々をすらし刑所ニも制札立て人の見こり

に被成来り候、まして善をすゝむるの御誠ならハしほらしき
賞をハ御知らせ可被遊事ニ御座候、然とも毎度触書もて御知
らせ御座候時ハ事煩敷順達の苦悩に深く心の入らぬ事ニも
成行可申哉、こふした人のありてと見し人の物語ニ弥深く
心も感し見まほしき情の発ものニ候へハ、大手辺一ヶ所に簡版所被
建置、孝子或奇特のもの御賞誉の度にと其行状を簡版へ張
置、往來の貴賤立寄親しく見候様被成置度事ニ存候、場所ハ幸
御政事所脇上書箱かゝり候少西のかたつゝきもよろしく相応
の所ニ候間、簡版二三枚かゝり候ほど大町札所の小きものニし
つらひ孝子奇特のものゝ出るを待て御掛初被成度存候
一 今度笹野村の孝子なと誠にしほらしく難有孝子ニ御
座候へハ是をはしめに被成置度ものニ存候
一 其行状を紙へ調簡版へ張置後人か賞誉を蒙り候を待て
張替可然候
一 右之図左之通



右御執行ハ一統の触達ニ及ハす出来候上掛之

(訳註①) 象魏 (しょうぎ) は高札のこと

諸御附横目并定横目御除附諸役場

へノ達書

欲左者左欲右者右欲高者高欲下者下

吾取其犯命者

附横目と定横目をやめること（ただし附横目と定横目の違い不明）

（朱書） 寛政三年六月二日申渡之

諸役場

諸役場の取量等閑ニ且虚妄姦曲之義有之不得止事中

古方御横目付之御沙汰ニも被相及来候所、此度其役場役場へ急

度被相任との御沙汰を以、御横目被召上候、御家中多き諸士之内擢

て被召仕候義ハ輕重となく己々か分におゐてハ名誉本望之事

ニ有之候、輕き役柄といへとも御治国の御相手奉申上候事ハ誰々も

同じ事ニ候へハ事々心を尽し力を極め向後忠誠之勤勿論の

事ニ被思召候、斯被仰出候上若勤方の等閑なる又ハ私曲不廉

事等相聞候ハ、御宥免の御沙汰ニ被及ましく候間、心得居候様被

仰出候事

（朱書） 此役料の事ハ此節不申渡追而別ニ評判之上夫々申渡之

一役頭の外三御扶持方並へハ米六俵ツ、御手明並へハ五俵宛、足輕

並のものへハ四俵宛、此度より改而役料被成下候事

○右ハ役場役場惣役方奉行宅へ召出、一役場ツ、召出申渡之、尤為承

知役頭召出右申渡手扣一通ツ、渡之

○右役頭役頭ハ先達而御前へ被召出御任之趣被 仰付候間、今日者
承知のミ達之、但役方共ハ於役所可申渡事ニ候所各別之
上意之義ニ付奉行直々申渡之

諸役場

三手御附横目衆

同

三御扶持方定横目

諸役場之取量等閑且虚妄姦曲之義有之中古々御横目

付之御沙汰相廢各御横目勤御頼之事ニ候所、此度役場役場へ可被相

任御沙汰を以一統御横目被召上候ニ付、組並之勤向可致精勤由被

仰出候事

一是迄勤方致大義候段 御意を以御吸物御酒被成下候事

○右文談之内定横目のものへハ御頼勤并御意の文談除之

(訳註①) 「欲左者左、欲右者右、欲高者高、欲下者下、吾取其犯命者」 呂氏春秋・孟冬紀・
異用の言葉。 左せんと欲する者は左せよ、右せんと欲する者は右せよ、高(のぼる) らん

と欲する者は高れ、下らんと欲する者は下れ、吾其の命を犯す者を取らえん（「命犯者」とは、左右上下以外から網に入って来るもの、乃ち前後から）。

諸役場半之日之定

役場の業務時間の定め、午前八時からお昼までとか、一日開けるとか

（朱書）

此ヶ条ハ追々伺出追々ニ相達候間濟口達日ハ不相定別ニ
開日休日等留置候ニ付爰ニ不記

諸役場へ

諸役場のものの勤方御弛のため是まで日勤之役場ハ向後半の
日開ニ致候様致させ候様被 仰出候、然といへとも此役場ハ春之内
事繁とか秋に至而事多ふなといふことく、役場ニよつてハ隔日ニ
成かたきも可有之然るを強て為弛有之てハ御用の滞又々人々の泥ニ

成事も可有之候へ者、其役場役場隙の時と取込之時とを考譬何月
方何月迄ハ不開共滞なく何月方何月迄ハ半之日開ニて間に合
何月方何月迄ハ何々之事あつて日勤ならてハ叶かたきなど
いふ事を役場役場方可書出候、其上を以開日可被相定候事

但可成丈出勤日少キ様くり合可申出候

○右之通諸役場へ達書出揃候上夫々閑日をたまハリ扱一統
為触知可申案

今度諸役場開日被 相定候右役場へ御用申出候心得

のため相達置候 (朱書) 此触知らせニハ及ましき評判ニて止ル

一 御政事所役所 不差懸事ハ朝五時方九時迄之内可申出候

一 代官所 右同断 但遠在農民遅々参着之者ハ不限時

一 町奉行所 右同断 但訴訟并伝馬人足等之申立不限時

一 御金蔵

一 御勘定所

一 御台所

一 御作事屋

一 大町判所

一 東町改所

右役場役場ハ常開而無間日

一 御宝物蔵

一 御兵具蔵

一 宗門蔵

一 上米蔵

一 平米蔵

一 備米蔵

一 粃蔵

一 定平夫銀蔵

一 郡割所

一 御林方

一 東御長屋

一 紙蔵

一 蠟蔵

一 青苧蔵

一 簀蔵

一味憎蔵

一炭蔵

右者年中之日開

右之通ニ候間可被相心得候、尤差懸る急用者各別、大抵之義ハ朝五ツ時ヲ九時迄之内罷出御用可申達候、尤遠在之もの遅く参着之ものハ不限時候事

○右ハ諸役場ヲ申出揃候上を以早々書入もあるへく候へとも其時の大
図を認置候

簡政并政令無遲滯策

簡政（行政の簡素化？）と願書・触書などをそのまま保存する方法

一大席エ列位シテ議スレハ口ニテ濟筆硯使札ノ煩累ナク政亦遲滯ナシ
一組支配ヲ其頭々ニ委任シ役所役所ノ量ヲ其役人ニ委任スレハ伺下
知ノ煩ナク政亦遲滯ナシ

一大抵ノコト鎖細ノコトニ至テ彼ト是ト違アレハトテ苦ニモナラス出入
ストモ何カアラン是等ノコトニ例格寸法ヲ立サレハ引合似寄穿鑿
ノ勞ナク政亦遲滯ナシ

一今ノ政ト云ハ大抵ハ金銀米錢差引ノ外ニ出ズ拝借米金錢ヲ
停ヌレハ願伺ノ煩ナシ

一收納寸納ヲ定テ納シムレハ人ヲ出ス煩ナシ

一願書伺書并万ノ書物長短トナク中折一枚ヘ書込テ出サスヘキコト

ナリ官府ニハ其事々ノ部分シ置テ譬名跡縁定ナラハ其願書

ヘ丹書ニ叶ノ字不叶ノ字ヲ書入テ官府ニ留置月冊ト力年冊ト力

相応ノ冊ニ積リタルトキ綴テ外題ヲ附テ置ヘシ是ニテ留扣ノ累ナク
証書ニテ残リテ明ナルナリ此部分多クアリ

附諸同書大津輕紙調大樣右同之

[illegible]

- 45 -

○諸書物一枚書ノ触書案

摠而官府へ奉願書面長きも短きも前後一寸之礼紙ニして中折

一枚へ書つゝり可差出候、長文ならハ幾はくも細ニ書へし甚長くして

一枚へ書終かたき事あらハ二枚へ調輕くとちて出へき事

但添書あらハ是亦長短共ニ一枚へ書つゝり候事右同断

附諸伺書ハ大津輕紙へ認て本文之通たるへし

○右ノ外触書ヲ省事多クアルヘシ譬櫓番触ノ類ナリ右櫓番触

ノ案

町内櫓番并新番所を立候事は迄ハ時々触達候所向後ハ時々不

相触候間高櫓并新番所共ニ三月朔日方番人差置怪敷もの改

へく候新番所ハ 月 日迄高櫓ハ 月 日迄差置其餘ハ番人

可相除候事

但年次ニより日次令進退事あらハ時ニ向て可触達候

○新番所と新ノ字アレハ何レ中古ヨリ始リシモノナルヘシ近来番人雇

兼町々大ニ迷惑ス綱目ニ風停ルナレトモトテモクハラリト止テハイカ、左ア

レハ高櫓ある町ハ新番所立ルニ及ハス前々高櫓ナキ町ハ是迄ノ通新番

所立ヘシト云触テハイカ、物騒シキ年並其時ニ向テ立番等達スレハ

又各別ニ諦ヨキモノナリ常ナルコトハ只設タルマテニテ用少キモノナリ

(行間の朱書)

○此櫓番の事寛延四年閏二月十一日左の朱字の通相触ル

諸士町内の高櫓年々三月一日より六月卅日迄番人可差置候、向後時々ハ不触達候事
但年柄ニより日次令進退事あらハ時ニ向て可相達候

一右之外是迄ハ新番所を補理番人差置候所向後不及此設事

但新番所を相除候へハ高櫓番人猶以嚴重ニ申付火事触ハ不及申若怪敷ものあらハ近
所向寄へ申出させ

遂吟味町奉行所へ可申出候

一是迄新番所立置候内ハ無桃灯の往来被相禁候所向後此禁を被相除候事

右之通被 仰出候間組中支配下へも可有伝達候以上

閏二月

○高櫓往古ハ三月一日ヨリ番人差置九月末ニ除タルコトニアリシヤ慥ナルコト
ハナケレトモ、主水町下高櫓番帳ノ末書ニ見エルト香坂右仲写シテ見セシヲ
留ヲク左之通

右櫓番帳九月末仕留ニて此番帳次番へ被差置翌年三月朔日
之番前ニて御請取うせさる様可然事

元禄六年

三月 日

此通ニ候へハ元禄ノ頃マテハ三月一日ヨリ九月末マテナリシトミユ

朱書へノ付札

是迄新番所云々のヶ条触出の際に至て評判変り左ノ二ヶ条ニ相変ル事
一三月一日方四月卅日まで往来のもの無桃灯停止の事
一町家の儀ハ都て是迄之通可相心得候事

○諸士町新番所の儀寛政四年二月前文朱書之通被相除候所、町家
十六町の新番所の儀も同六年二月願ニよつて相止候事

諸士之子弟土著

家臣の二三男など農村に土着し結婚し百姓をすることの勧め

(朱書)

此ヶ条寛政四年十一月十日御下知あり

同廿八日発ス但文談取捨あり

諸士 頭々

諸士の二三男兄弟伯父甥等勝手次第土著し妻子をつかえて
致耕作候様被 仰出候、農ハ士に次て賤からぬものに候へハ必恥へき
事ニあらず候、尤諸士其組並之身分をハ急度御立被成下家元の末
家として年次御目見をも可被 仰付、尤本家取組候仲間への名
跡縁定等も可被 仰付候、扨何ぞ事ある時本家ニ属して一人
前の働もなさハ武士の本意本末の誉れたるべく候

但土著願出るにおゐてハ相応の田畠家作被成下三ヶ年の貢

被差免四年目方其地ニ当る年貢御取上可被成候

右之通被 仰出候間、追々勝手次第可被願出候、此旨組中支配下へも

可被相達候

○侍組大室主計三男小倉文弥土著是被 仰出候後土著の始なり
此節の留

九月廿五日寛政七年也

毛利組糠野目御役屋将

大室主計

右ハ三男小倉文弥糠野目村手餘地引請外ニ同所山王後并河原

前永引跡開発為致土著度由願之通相済候事

一家作料二十貫文被下候事

一來作夫食として粃十俵御借候事

一來年方三ヶ年貢御免四年目方貢被召上候事

一文弥土著といへとも宗門帳ハ永々大室家の帳末へ可書出候、然と

いへとも田畠道の事ハ村役の支配たるの間可任村法村格旨肝煎へ

一札可差出置、尤田畠道ニ付代官所等へ差出候諸書物等へハ百姓と高

次第百姓代も連名たるへき事

一民間ニ土著といへとも何そ事ある時本家ニ属して一人前の働を

なすへきものニ付兼而武道不可怠事

右之通被 仰出候間屹申付候様主計へ可相達由莅戸六郎兵衛宅へ
毛利若狭召出申達之

○代官所方肝煎へ達して為取立候一札之案左之通

今度土著被 仰付候ニ付差出候一札之事

一田畠道之事御所納道村小夫銀諸普請村役の人足其外総而
百姓道之事ニ付而ハ子々孫々迄肝煎の支配ニしたかひ総而村法村
格相背間敷事

一宗門御改帳ハ本家の帳へ永代書載候間、村帳ハ相除申候、然と
いへとも高附其外御代官所へ村方連印を以差出候書面等へハ高順
次第之連名を以平百姓へ相列可致印判候事

一氏種姓を立、小前百姓ニ驕、村役を蔑ニ致間敷候事
右之通百姓道之事ニ付てハ村役の差図相漏申間敷候、仍
一札如件

年号月日

糠目土著小倉文弥

百姓代

・・・印

肝煎宛

・・・殿

○土著の者年始御目見御決評左之通

一正月十五日御式台にて御目見席ハ本家平の席へ被召出候事
但服ハ服紗献上物無之

(訳註①) 土著(どちやく)は土着と同じ

諸品御国産ヲ用

さまざま米沢製品を使用のこと

(朱書)

此ヶ条寛政四年十一月十日御下知あり同廿八日発ス
但文談大ニ取捨あり

諸役場

公儀ニての御用意物諸器物をはしめ絹麻木綿の類或
量表唐紙引手釘かくしの類其外何品によらすよくも
あしくも貴くも賤くも向後ハ御国産の品を以御用意
いたし候様被 仰出候、尤

御上御座右御用の品たり共同断之事

但御用意ニ当て其品なき又ハ不足なると云ニ至てハ
伺出へし

御仕成半分之命令案

諸役場の仕成（芳賀・辞典では「ある状態になること」とするが、ここでは経費のようだ）
を半減すること

（朱書） 寛政三年五月廿六日申渡之

不限諸役場一統触

御国許の万事可成丈半減之御仕成と被 仰出候間、事々

半減之取量可有之候、可成分ハ其懸り合懸り合の評判を

以不及伺取量追而可被届出候、成かたかるへきといふ事あるをハ

可被伺候、成ましき事の成ましきハ同く誰も同事ニ候へ共何れ

御沙汰の品の有ましきものニも無之候へハ成かたきとおもはん

事も不捨置可被伺出候事

右之通被 仰出候間諸御役義相勤候面々諸事ニ懸り合候

面々無遺失相心得候様組中支配下へも可有伝達候

御方々様へ万事御仕切通ト被 仰進

方々（藩主の係累）の用人に対し、窮迫なので御殿の窓・障子の補修は仕切（帳簿上の決算）のとおり支出のこと、その他節約のこと

（朱書）

△此ヶ条寛政三年五月廿七日

御方々様御用人へ相達ス

大殿様へ

御使御家老

無御本意ハ 思召候へ共、御窮迫之此節、無御扱其 御殿窓

障子之張替向後御仕切之内を以被 仰付進候様御願被 仰進候

一 御品廻之品々向後者歩減ニ被進度御願被 仰進候

一 御方々様御相互御慶事之節、向後ハ鯛一折式連ツ、為取かハし

被成候様被 仰進候、尤御平常御附届等も何ほとも御手輕

く御贈答被成候様被 仰進候ニ付 大殿様ニも右ニ御準被 進

候様御願被 仰進候

付
札

此ヶ条奉伺候所御評判之上五月廿二日御下知下る左之通

○大殿様へハ御殿御手入或御修復普請屋根漏さし畳の表替窓

障子張替等の御入料三ヶ年平均高を以向後御用人取量ニ被 仰出

但御入料御金藏方渡且作事屋品申立ニ候ハ、定法直段正錢掛ニ而

可相渡由 (朱書) 百五貫文

○中殿様へハ右平均高三ヶ一引ニして右同断 (朱書) 五十貫文

○相模様右同断 (朱書) 二十五貫文

○宣庸院様右同断 (朱書) 二十貫文

○若殿様ハ漏さしを除外右同断 (朱書) 七貫文

○近江様右同断 (朱書) 五貫文

○三之御丸二之御丸御部屋様方右同断 (朱書) 三ノ丸御奥十二貫文

(朱書) 二之丸御奥二十三貫文

○駿河守様へハ是迄三十両以上の不時被 仰立次第被進來候所別而

重立候義ハ各別大抵之事ニ而ハ被進ましき由

右何も御用人呼出申渡候筈駿河守様へハ須田数馬呼出申渡候筈

(朱書) ○御本丸御奥十二貫文

中殿様へ

御使御家老

無御本意被 思召候へ共御窮迫之此節、無御抛 其御殿向諸御普請
屋根漏差畳の表替窓障子の張替或御出等之節々夫方并御供

廻御借物等之類迄向後ハ其御殿御仕切之内を以被 仰付進候様御願
被 仰進候

一 右御時節ニ候へ者、御平常万事御手輕、尤御規式張候事或御格式立候事
御省御つゝまやかに被 仰付進候様御願被 仰進候

一 御方々様御相互御慶事之節、御祝儀物向後ハ鯛一折式連ツ、御取
通被成候様被 仰進候、尤御平常御附届之事も何ほとも御手輕御
贈答被成候様被 仰進ニ付、中殿様ニも右ニ御准被進候様御願被 仰進候
一 御品廻り之品々向後ハ一步減ニ被進度御願被 仰進候

若殿様へ

御使御家老

御氣之毒ニ被 思召候へとも御窮迫之此節、無御抛御座所廻り畳の表替
窓障子の張替或御出等之節夫方并御供廻御借物等之類迄向後ハ御仕

切之内を以被 仰付候様被 仰進候

一 右御時節ニ候へ者御平常万事御手輕、尤御規式張候事或御格式立候事
御省御つゝまやかに御暮被成候様被 仰進候

一 御方々様御相互御慶事之節御祝儀物、向後ハ鰯一折式連ツ、御取通
被成候様被 仰進候、尤御平常御附届等之事も右ニ御准何ほとも御手輕
御贈答被成候様被 仰進候

一 御品廻り之品々向後ハ一步減ニ被進候筈ニ被 仰進候

相模様

近江様

三之御丸

御部屋様

二之御丸

三御部屋様

宣庸院様

御小座敷

御使御家老

御氣之毒ニハ 思召候へ共御窮迫之此節、無御抛 其御殿向御普請屋

根漏さし畳の表替窓障子の張替或御出等之節夫方并御供廻御

借物等之類迄向後ハ 其御殿御仕切之内を以被 仰付候様被 仰進候

一 右御時節二候へ者御平常万事御手輕、尤御規式張候事或御格式立候事御省御つゝまやかに御暮被成候様被 仰進候

一 御方々様御相互御慶事之節、御祝儀物向後ハ鯛一折式連ツ、御取通被成候様被 仰進候、尤御平常御附届等之事も右ニ御准何とも御手輕御贈

答被成候様被 仰進候

一 御品廻品々向後ハ一步減二被進候筈ニ被 仰進候

一 被進候米金之内一步減被 進之

一 御慶事御祝儀物并平常御附届之ヶ条書入被 仰進之

鉄砲星場一箇所并鉄砲事数条附上覧御仕成

鉄砲の稽古期間、矩の鉄砲を追廻馬場にすること、矩の鉄砲・上覧鉄砲の方法などについて、なお鉄砲については別途条項がある

○触書案

鉄砲稽古打之事是迄ハ正月七日被 仰出御停止之事も追而触

達来候所、向後ハ正月七日朝方同月卅日夕迄打候様被 仰出候事

一夜鉄砲御停止是迄之通ニ候事

一右之通ニハ候得共夜打候而稽古ニも致候ハ、師匠師匠日を定可伺出候事

一遠町稽古打是迄之通候事

一主水町御屋敷ニ六間打稽古所被 相設候間、年中何時ニ候も師

匠々々門弟召連為致稽古候様被 仰出候事

一諸組矩之鉄砲組々勝手勝手之場所ニ而為打来候所、向後ハ追廻馬

場ニ而為打候様被 仰出候事

但日次之事ハ是迄横目被差出候日次の順たるへく候

一星山井内小屋ハ是迄星場持之組並惣寄合ニして補理可申候

其外ハ御入料を以補理可被相渡候事

一侍組之家来鉄砲も右跡山ニて為打可申事

但星山井内小屋補理ハ星場持の一手たるへし

一上覧之節ハ右内小屋可致御借上候事

一上覧之年並ニハ近来矩之鉄砲御免ニ候所、向後ハ 上覧の年並

といへとも矩之鉄砲為打可申事

一立之次第書奉行中御小姓頭中へ一本ツ、御中之間年寄へ一本、丸田九左衛門へ一本、御使番へ一本ツ、御右筆へ一本、矢前へ一本各輕キ卷立ニして可被差出候事

但上覽有之年並ニハ矩之鉄砲清帳不及差上且又清帳向
後ハ筈高ニ不相成様大津輕冊小筆ニ可相調候

一玉返之事是迄矩之鉄砲之時之通可被取量候 上覽之年並ニハ
四放之内二放之玉返ニ可被取量候、此年並ニハ残玉半分丸田九
左衛門へ被下、残る半分ハ山築候もの共の所得たるへく候事

一丸田九左衛門へ相達候久敷夏矩 上覽打絶候ニ付近年中可被遊
上覽との御沙汰ニ候間、往古之ことく糠山ニて御手輕き 上覽
の御模様大熊左登美はしめ功者の面々へ追々可被遂相談
置候事

右之通被 仰出候間被得其意組中支配下へも可被相達候

付
札

此ヶ条奉伺候所五月廿二日御下知下る此外長井庄左衛門便利の心付あり
御馬見所西へ星場を修理御殿方西向の上覧なれハ馬鉄砲両様を兼る
と便利の存寄有之二付其旨奉伺候所御殿両様の方ニ御下知下る
扱此冊ヶ条之内御下知左之通

○正月七日朝方卅日夕迄の事弥此通

○夜鉄砲御免之事先御見合

○主水町御屋敷ニ而年中六間打の事弥其通尤師匠師匠組頭等申合

○諸組侍組共二矩の鉄砲追廻馬場裏ニ而打せ候事弥其通

○長井心付之通ニ候故尤以内小屋諸組心遣ニ及ハす

○上覧之年並ニハ矩不打事近年迄之通たるべし

○夏矩の事先御見合

○拾匁筒へハ双矢中へ計折紙可被下由

○塩硝代ハ二十三年も以上か拾匁筒片矢へも折紙被下と被 仰出候時の前
の塩硝代之通可被下由

○上覧御仕成

一 小屋補理是迄方ハ甚手狭ニして尤詰人を減す但御馬見所一切不用
一 御行列是迄之通

一 御膳御弁当ニて上之

一 奉行衆はしめ何れも焼飯尤御賄ハ下列同断

一 御酒被下列御中入之節其詰所ニ而三献通

此通ナラハ触書ヘ書加アルヘシ

一 手柄御賞之事筒之大小に限らず双矢中のものへ計是迄之通

塩硝折紙ニ而被下候 但塩硝代是迄之倍ニして被下

一 頭共ヘ御通被下事是迄之通

(朱書)

○寛政七年十一月廿四日丸田九左衛門来春玉薬渡方伺書ヘ付札ニ而

来春方ハ矩鉄砲四放通可被 仰付候間、玉薬其心得可有之候事

右之通付札ニして相達候事

縦免出米

「縦免出米」どう読むか？、 今後、米・粃を他領へ出すことを許可

（朱書） 此ヶ条寛政三年七月廿二日達

郡奉行中

町奉行中

（傍線部分朱書）

米と粃との他邦出、向後四境口々勝手次第御免之事

一松川下是又被差免候間、勝手次第船を制立可致運漕事

一口々并川下共通判を以可通候、口々ハ其番所江差出每俵受改、川下

ハ正部陣屋へ差出每俵受改見済の通判大瀬口へ出可通船事

但差出品物通判江可書記候

付札 且多分の俵数一同二下かたきに至てハ

其の通判を正部陣屋へ出し陣屋方小割通通判を受て下すべく候

一此通二ハ被 仰出候へ共年次により被 差留事も可有之候、此段ハ時二当
て可触達候事

右之通被 仰出候間、勝手次第可差出候、尤船中一品たり共留物并

役懸りの品を込候ハ、通判面之俵数被召上候間可存其旨候

○正部陣屋前へ舟番所を立、番人可差置候、若又陣屋勤のもの
兼帯にて外に人を差添候まで二ても可然歟

○口々并舟番所江の達書

四境 口々番所

正部陣屋

今度米と粃との他邦出、御免別紙の通被 仰出候間、嚴重ニ可改候

さしかねを渡置候間、毎俵ニ縦横刺試怪品を込候ハ、留置早

速可申出事 但船中も残す所なく改へく候

(朱書)

○此ヶ条奉伺候所此通たるへきよし五月廿二日御下知下る

○此通既御下知をハ奉請候へとも、いと運漕のむつかしきに餘穀迄恣ニ免し候

ハ、夫たけ米の運漕駄送の不足にも行廻るへきかと考当り候故、穀物と

調候所を米と相直し餘穀ハ是迄之通願之上其時々吟味次第と相極候

恣他邦出しを免候事畢竟ハ米価の賤けれハ四民の泥ニ候故を以なり

覚

樋口茂右衛門

米と粃との他邦出、向後四境口々勝手次第御免二候、尤是迄役所へ
願出濟口次第出判取量来候所、自今不及願判所へ俵数申出
次第出判取量一ヶ年限出高可届出候事
右之通被 仰付候、其外松川通商船出入御免等之儀別紙四
通之通二候間可被得其意候

穀物駄送他邦出策文

米沢は山で囲まれ穀物を他領に出すこと困難、境口へ保管して駄送して他領に出したりしているが、良い方法を考え出すこと

(朱書) 寛政三年四月十六日御用懸山崎弥兵衛へ渡ス

御用懸

御勘定頭中

御国ハ四境数重の山にてかこミ候故穀物の他邦出し便あしく候
利潤なくツウフウと云ほと二てもおのつから御国益と相見候へ者

譬へハ上郷の米ハ大沢村ニて取立、松川東北ハ中山村へ納きすると
申如く、四境口々其便宜の所へ取納置、追而駄送を以他邦弘ニ
いたすなとと申こととき致方も可有之歟、此等之組立承度存候、此
外巧者の面々之上ニハ何れ容易き出しかたの思慮も浮可申儀
御良策承度存候

但御用懸之衆計ニも不相限義、其筋巧者の衆へハ広く被相達
何ヶ条も其品承度存候

商船松川出入御免

商船が松川を通ることを許可

(朱書) 此ヶ条寛政三年七月廿二日達

郡奉行中
郡奉行中

一松川通商船出入御免之事

一通判并商荷正部陣屋大瀬口番所へ差出可受改事

(朱書) 但正部にて見済候通判大瀬口へ可差出候

右之通被 仰出候間、是迄口々罷通候例を以可致往還候、尤船中一品たりとも通判外怪敷品を込候ハ、荷物無残被召上候間、可存其旨候

右之通可被触知候

○正部舟番所へノ達書

正部陣屋

今度松川通商船之出入御免別紙之通被 仰出候間、嚴重可改候
尤荷物之外船中無残相改怪敷品あらハ惣荷物留置早速可

申出事

黒井評

△他領ノ商人ハ禁スヘシ怪鋪トテ惣荷物取上ニモナラス

(朱書)

○此ヶ条奉伺候所此通たるへし、但他領商人の禁ハセハシ正部番所の改ニて怪敷事あるへからすとの御下知下る、五月廿二日御下知

蔵々不私升

蔵々は升を私しせず（？），年貢を蔵納する際の手順・基準

（朱書）

此ヶ条寛政三年九月十一日達ス

但仕法文談共ニ別段ニいたす次ニ申渡書案留置

郡奉行中

考合つきなり

年貢穀物御蔵納之事当秋方左之通被相改候

一上米ハ一俵四斗五升へ欠石のため四升の込米して可納候、尤米性

別而宜を撰ふきはきともに猶可入念事

但百姓直概并俵の拵是迄之通

一平米ハ一俵四斗五升へ二升の込米して可納候、米性を選ふきはき

可入念事 但右同断

一大豆糯荳油之儀も右平米同様之事

右之通被 相改候、尤蔵々におゐて米性をはしめ嚴重ニ遂吟

味候筈ニ付無龜末様可被申付置候

黒井評

○右三行トモニ俵ニツキ四合ノ下鋪米ハ古法ノ通タルヘキヨシ

蔵々へ

年貢穀物御蔵納之事今度別紙之通被相改候間、米性を初

ふきはきの善悪まで如前々嚴重遂吟味可取納事

一蔵々ニて米穀相渡候節端物渡ハ各別俵渡ニ至而ハ則取納候

俵のまま可相渡事

一蔵々明時相開順々はからせ百姓帰不滞様致へき事

右之通諸事入念可相勤候

黒井評

○平米ノコトハ入米ヲ禁スレハ私ナシ、但上米ハ遠方ヨリ済スモノ又ハ米性悪キ村

方ナレハ上米ハカリカタキニツキ入師ヲ不頼レハ不叶、仍上米ハカリハ入米ヲ禁シ

カタシ、平米ノコトハ預札ニテ済スコトナルユヘ遠方トイヘトモ百姓ノ泥ナシ

○右上米四升平米二升の込米ニ候へは是迄八九升乃至一斗ニも至まで取

まし候にくらへて甚の御恵ニ候へとも是迄ハ表向所々四斗五升のつもりにて私ある

ハ不表立事ニ候所、今改て四升二升の過納申付候もし公躰へ訴候ものにて

有之候てハ御家の御ために不成事ほとに至る事の有まじきもの二もなけれハ
いかか敷との 中殿様思召有之、追々評判之上つまり左之通決評申渡相済

寛政三年九月十一日申渡

上米蔵

平米蔵

役方

蔵々ニて上米平米の取立、欠米のためとて古来升の外ゆたかに取
来候由、向後ハ可入たけを升ニ込、其上を百姓共直概ニいたさせへく候

縦令ゆり入込込候とも可入たけ入候ハ全升目の外に無之候少も升

目の外をハ取申ましき事

○右ノ通我等量ヲ以役所ニ於て申渡させ候、扱又上米へハ一升の込米不申付候てハ

差支眼前ニ付代官所懸役を村方へ相廻左之通申渡請書とらせ候、右達書左之通

別紙之通御蔵々へ被 仰渡候、然所上米之事ハ海上の運漕百里餘

日数も百日を経候、遠着も有之いつも欠米不少ものニて候へハ、込米無之

候而ハ御差支眼前の事ニ候、依之上米ニ限り一俵ニ一升の込米ニして可

相納候、別意無之哉以返答書可申出候

付札

会談所并御用懸御勘定頭役所役存寄申聞候付て此一ヶ条書入候
ニ付付札いたし置（朱書） 此ヶ条ハ平米藏へ同日申渡
一米渡方の事預札に代て差出事ニ候へ者、夏ニ成欠米立俵の内
実升目通無之候而者御扶持人の泥ニ候間其節ハ壹俵四斗
六升の計立ニして可相渡候事

江戸米沢之便諸組交替ヲ以定日ヲ立ル

江戸と米沢の諸士・下々の交替の日を定めること

江戸米沢諸士并下々迄の交替往来を以月々四九とか五十の日とかに割合置候時ハ両地御用有之時の便よろしかるへき歟、米沢立ニ定日有之候へハ江戸立もおのつから定日の様ニ相成人々覺やすく先以御用の取運も可宜存候、此通ニ有之候ハ、態と飛脚を立或賃銭送等出ス世話も可省歟と存候、何歟取しらせ割合為覚

有之度存候

但道中三四人連ニしても纔の江戸つめ月六度つゝの交

替ニハ行届まじきか、左候ハ、三四度の定日ニても其相応ニ便も宜

かるへく候、先以初年の交替ニハ差留或懸登とて渡物の差

引等まで苦惱ニも可有之、且一組之交替を分候而者差支候

事も可有之歟、不成事ならハ捨候に別義も無之兎も角も

割合て見申度存候

川漁一過停止并翌年一過他邦入鮮魚停止

一年限りで川で魚取りを禁止、他領からの魚も買い取り禁止

一統触

当年一過川々ニて魚取候事御停止被 仰出候、他領方入来候
共御停止中買取申ましき事

集問屋
魚

鰯屋

八百屋

当年一過川々の魚取御停止被
仰出候ニ付、川魚買取ましく候
他領方持入候とも買取ましく候

一來年一過他邦入鮮魚御停止被
仰出候間、兼而送替候
者共へ無間違様可申遣置候、尤口々番所へも被
仰付置候事

口々番所

來年一過他邦入鮮魚御停止被
仰出候間鰯入荷物

可相改候事

但不案内ニて持入持返し候事ハ不便の事ニ候間、鰯荷
持入候者共へ今年之上方追々可為知置候

禁百姓奉公於町家

町家で百姓が奉公することを禁止

在郷

覚

百姓共町家へ奉公いたし候へハ自然と町人の風ニなり殊身骨を
おしミ果ニハ商人家業ニ成候義農業の貴きもワすれ候不

届ニ至候間、町家の者への奉公御停止被 仰出候事

但今既ニ奉公いたし居候ものあらハ来年二月宗門御改以前

暇を取可罷帰候、尤給銀日割返納之事御家中在郷の内へ

居替へ候、何れ不遅々様肝煎組頭等宜致世話候

月日

町

覚

百姓共町家のものへ奉公いたし候へハ自然と町人の風ニなり果々ハ

商人の家業を奪ひ本業を忘候ニ付此度町家への奉公御停止

被 仰出候間、以来在郷の者召仕ましく候、町家のもの町家の者

を召仕候時ハ幼少方見なれ聞なれて自然と双方のためニ相

成事ニ候間、兼而検断組頭心を用ひ町家の内心遣し置

町家ニて召仕ふもの、事かけぬ様ニ致へく候事

但今既ニ召仕置候ものあらへ来年二月宗門御改以前暇
出し可相返候、尤給銀無遅々取量候様肝煎組頭へ申付置候
月日

停赤湯鍋

赤湯の鍋（売春）を停止する

（朱書）

○寛政七年十一月廿四日達文談増減あり

外鍋印書物袋入ニして有之

段此通ニハ記候へキ一ツ書方末認入置候事

郡奉行中

赤湯村ニおゐて古来鍋と唱て客取扱の女抱候儀を被免置候所
人を溺しそこなひ候間、此度被相停止候事

但抱置候女とも十二月限暇出請払きハめ相払可申候

右之通可被申付候

月 日

一 右村方自然と遊里の様ニ心得候より民俗云々成来候付、村の三役并湯守宿屋等召出遊惰の風を改、百姓の天職を守へく

宿屋のもの共ハ客の扱無疎意自他湯治のものゝあやまちなき

様心を尽可取扱旨懇ニ可被申付、於各も右村方の世話各別ニ可被用心候事

一 郷村出役唐沢十左衛門是迄ハ居村を宮内村ニ定置候所、今度赤湯村を居村ニ相達候間可被得其意候事

郷村出役与板

唐沢十左衛門

右ハ是迄ハ宮内村を居村ニ相達置候所、宮内村之儀ハ民風も粗相興候へハ従是ハ赤湯村を居村ニして可被相勤候事

右之通蒞戸六郎兵衛宅へ召出申渡之、且又今日赤湯鍋御城下馬市へ出酒相手等いたし候一卷の御落着、町奉行所にて為相達候

但右御落着書ハ別ニ留置候故略之

樹芸

各種の樹木を育てること、桑・楮・杉・桐・檜・しおじ（ハリギリ）・草卷（榎、ヒノキ
アスナロ）・黄連・灸草（ヨモギ）

（朱書） 此ヶ條寛政三年七月十五日役所にて達させ候事

桑楮

（朱書） 追て役名山林方と改ル

御林方

後年四民へ桑楮苗木被成下候間、相応の地所を見立実ふせ刺
木等三四ヶ年之間追々可取量候、尤渡方不便利無之ため御城下ハ
東西南北三四ヶ所在郷も其向寄々々を考程能所へ苗畠可

相立候事

○右之通今年被 仰付置右取量あり移植る相応ニ生立候年左之通

四民へ触達ス

桑楮ハ四民の潤御国用の助ニ候間何とそ多く植させ候様被

仰出候、苗木ハは望次第被成下候間、山沢或空地明地又ハ土手通

垣根々々等ニ至迄餘隙を以植立、後年の助ニ致候様被 仰出候事

但苗木望のものハ苦悩の申立ニおよハす御城下ハ何方々々在郷ハ

何村々々ニ苗木畠被立置候間其向寄次第人を遣し断にも

およハす望の木数掘取可申候

(朱書の行間)

触之趣ハ御林方へ心得のため達置候迄ニ候へ共此趣意相漏候哉苗木植頃ニ生立候へ者
不待此触人々掘取候由ニ付て此触書ハ終不差出候

但右苗木之懸りハ追而郷村出役の懸りニいたし候事

(朱書)

此ヶ條

杉 桐 シホヂ

御林方

寛政三年七月十五日

檜 草卷

(朱書)

山林方ト改ル

役所ニて達させ候事

杉ハ良材ニ付後年のため植立可被 仰付候、桐之木も不足之材ニ候

間植立可被仰付候、シホヂと申木近年御城下所々ニ植立相見候

鎌の柄ニ用足ると申候へハ是又植立可被仰付候、追々廻村の次手

相応之地所を撰置植立候様可致候、尤右植立之模様遂評

判可申出候

但苗木之儀ハ実伏或刺木等を以當時方心懸置可申候

旁遂評判可申聞候

一 檜草まき良材ニ候所於に今ハ剪尽近山ニ絶て無之候ニ付為
後年相応之地所へ植立可被 仰付候、依之右植立之仕方并相
応之地所等ニ至迄巧者の者へ遂評判追而可申出候

〔覺〕まで朱書

右之通達置候所十一月中御林方の伺出左之通

一 春木場所ハ矢子大明神林并城山林北平可然由

一 式百本ツ、御買入被仰付候ハ、追々可出由申出候由

一 桐木ハ和泉村赤湯村成島村右三ヶ所御林之内へ植立尤苗木ハ追々可心懸由

但しほし植地所ハ廻村之上見分可致由

一 杉ハ御植立并忠信植立共取合拾五万本位あるへし此末共ニ可植立

乍去入料不容易候へハ急ニハ成ましきよし

一 桑苗ハ一万本ほと有之無代か代払か濟口承度由

一 楮苗木伏方無覺束ニ付先年之通一文ツ、御買上被仰付度巧者の

伏人有之ニ付先木数三千位も被仰付度由渡方の事も右同斷下知

承度由

覺

(朱書) 此ヶ條 寛政四年閏二月十日役所ニ而達させ候事

追而山林方ニ改ル

御林方

一 春木植立之事追年二百本計ツ、植立、尤場所之儀ハ矢子大明神林并城山御林北平右両所可為伺之通候、尤苗木買入ニして当年より植立可被取量候

一 桐之事和泉村赤湯村成島村三ヶ所御林之内へ植立伺之通、外ニも御城下近き在々又御城下空地相応之地所も有之時ハ細工人之勝手ニも可成候へハ工夫專一二候

但しほし植立地所之儀ハ伺之通廻村之次手見分可有之候

一 杉之事御入料并忠信植立分取合十五万本位も有之由不

少事ニ候、尤此末追々植立成長を見分可有之候、扱杉も御城下への運漕よろしき所ならハ猶々可然候、尤急ニ致事ハ跡の不遂もの

ニ候へハ年々二百三百乃至五百本計ツ、も可被植立候、且苗木

伏ニて何ほとも出申もの、由是も望人へ無代ニて可被下候間致実伏移植相応のそたちの時可被届出候

一桑苗木之儀も伺之通望次第無代ニ而広く可被成下候間、宜被取
量候、乍去纔ニ一万本計の事触達して被成下程ニハ不行届儀依之
此末ハ心遣を以苗木多取そたて望ニまかせ無代ニて被成下候様可被相
量、尤当年方段々取木実伏ニして両三年之内触達し候て被成
下候様可被心懸候

一楮苗木之儀も相成たけ苗伏いたし触達無代ニ而不成下候様
可被取量候、桑苗と違急段ニハ相成ましき哉、連々心遣有之
何レカ追々苗木可被心懸候
右之通被仰付候万事急段ニしてハ御入料も懸り増可申ニ付此
所勘弁宜被取量猶又存寄も於有之者可被申出候事

閏二月

桑楮柿

(朱書)

此ヶ條

被 仰出もなく在郷一向之事故我等切ニ
相達追々にくれさせ候事

代官中

御国用のためにも有之民家之ために候間御郡中百姓の竈こと
屋敷の垣根又ハ隙地へ植候様ニとて桑苗五本ツ、水屋尻又ハ
雪隠の後へとて楮苗五本ツ、屋敷庭の内へ植よとて柿苗
一本ツ、くれ可被申候

右之通一過くれ候而若後年まだも植度望あらん時のため
毎村肝煎の屋敷内一二間の所へ村のために右三種の苗畠
をこしらひ手入し置て望のものにくれ候様能懇ニ可被申含候

但右苗畠の事ハ永々ニハ無之此末五七年之間其世話いたし
候様心得のため可被申聞置候

右一過にくれ渡し候苗木また不足にて可有之候、仍来年夫々
の時を以其数ニ足候ほと代官所構之内へ三種之苗畠をこし
らい手入致させ可被申候

黄連

(朱書)

此ヶ條

寛政九年二月

日達ス

諸士一統触

後国産方

別紙触書之通今度被 仰出候間苗并実伏等之事遂
評判可被申出候事

薬種屋大町

九里三郎兵衛

別紙触書之通今度被 仰出候追々出来次第捌方宜取量事

右触書

黄連ハ山生のものニ候所、大石遊甫移試候所屋敷々々木下物
蔭日陰の所殊相応にて五七年ニして其益不少由、諸士屋敷
各大小有之候へ共木下物陰無用之地其相応ニ有之ものニ付、御国益の
ため追々心懸無用之地へ作らせ候様ニとの御事ニ候、遅速ハ有之候へ共
苗植ニ而も実を蒔候而も五七年ニハ相応の益有之由、尤何もへ
被下候ため苗の世話実の世話迄も被 仰出候へ共、急々可行渡取
量不行立候其内各致心配苗或実を得て可被心懸候、屋敷の
大小広狭ニも可依候へ共後年一屋敷一斤ツ、出候而も御国益
の一ニ候条、追々可被心懸候、尤右製方揃方等之儀御国産方
并薬種屋九里三郎兵衛へ被 仰付置候事

灸草

(朱書)

此ヶ條

寛政九年二月 日達ス

小国共

代官中

百姓共男女隙の時又ハ休日等の手業ニ四月下旬より五月下旬迄之内よもきを刈取かげほしニして村の肝煎へ納置時を以て代官所へ納させ可被申候、郡割所ニ於て灸草ニいたさせ御国産方量にて捌せ追而代料可被下候事

御国産方

郡割方

今度艾葉納之事別紙之通相達候、代官所へ納候ハ、郡割所にて受取徒罪の手ニ灸草ニ製させ御国産所量を以九里三郎兵衛へ相渡捌かせ右代料諸雜用差引代官所へ可被相送候事

九里三郎兵衛

別紙両通之通ニ付製方或袋作荷作等の儀郡割方へ
致■出来之上捌方之儀宜取量候事

養蚕 (朱書) 此量ハ竹股へ譲ル

(朱書) 此ヶ条寛政九年三月二日触あり

諸士一統触

今度御国民のため蚕桑取立候様被 仰出於 御本丸御奥
も蚕御試之事ニ候、依之御家中大臣小臣となく多少に
限らず一統蚕致候様被 仰出候、乍然兼而桑の手当
無之面々急段其業ニおもむくへき様無之事ニ付追々
心懸五三年之内家々相応の蚕いたし候様被 仰出候事

○無給勤御除

無給での勤めをやめる

四境廻勤

荒砥御附馬上忠左衛門嫡子

一 壹両三分御擬

宛

一 金小判一枚暮御賞

東町改所御附横目

一 二両二分

隱密横目

一 在勤十日二金壹分宛

右是迄者奉行中直達

新帳清書方

一 六俵暮御賞

御預所懸役当分加人

一 三俵御手当米

高橋伊久馬

五十騎藤右衛門嫡子

大石五郎左衛門

御馬廻采助嫡子

石坂栄太

与板茂左衛門嫡子

上倉利惣

御馬廻七左衛門嫡子

西堀園右衛門

御役所役善右衛門嫡子

原 寛次

同助五郎嫡子

吉池文六

御預所懸役定加人

一 三俵宛御手当米

東町改所役方

一 十俵同

御代官所懸役定加人

一 三俵ツ、同

竹俣御附物書

一 十四俵同

組外伊左衛門嫡子

田村勇八

御預所代官幾藏同

須田丈助

組外次兵衛嫡子

加藤恒藏

組外十右衛門嫡子

窪島左膳太

同長兵衛同

佐藤友次

組外五十人頭金五兵衛嫡子

服部仙弥

御把針手伝

組外兵八嫡子

一 十俵

高橋元助

○二之丸御把針也 二之丸様御仕切ノ内

を以被下被召仕候事ハ御勝手次第之事

御徒市助嫡子

御徒目付

古簀源次郎

一 十四俵同

同伝右衛門同

二斗九升ツ、

池村新左衛門

御徒組仲間無人二付

同左吉嫡子

一三俵半宛同

近藤清次

同庄藏同

滝口源藏

御細工組

与右衛門嫡子

一 三俵

御手当

金子新八

五斗上除七名

同

一 三俵 同

小国茶いさば十分二横目

一 半俵 同

中山金神林萱野量

一 一俵御手当

一 一俵同

仲間無人二付

一 一俵ツ、暮御賞

同

一 同々

嘉次右衛門同

秋山万之助

小国御役屋付御扶持方徳右衛門嫡子

三須文五右衛門

中山御役屋付御扶持方常四郎父

隠居 小沼運蔵

荒砥御役屋付御扶持方並清蔵嫡子

山口孫九郎

本手明

二十三人

新天明

十七人

右者役所役人を以申渡之

右是迄直勤並夫々勤向被 仰付置候処、御蔵元御窮迫之此節二付被相除候事

但御擬金御手当米之儀者是迄之日割を以被成下候

一是迄勤方致太儀候付 御意を以御吸物御酒被成下候事

右之通被 仰出候付支配頭同道誰宅江召出申渡之、尤其役場役場同列をも召出承知達之

△―――△

○廻扶持

御茶道

御掃除坊主弥佐嫡子

一 加藤仙賀

↗

御掃除坊主

一 一人扶持四石宛

五人

江戸御同心下番

一 一人扶持二石五斗ツ、

三人

御中間小組

惣御足輕

各是迄直勤並勤向被 仰付置候処、御蔵元御窮迫之此節二付被相除候事

一是迄勤方致太儀候付御吸物御酒被成下候事

右之通被 仰出候付支配頭同道誰宅江召出申渡之

○加藤仙賀ハ御意以之文談加之奉行中直達、尤掃除坊主番頭召出向後支配可致旨役人を以達之

西條志摩

御徒組頭

御中之間年寄

新手明組頭

同

各支配 本手明組

御徒組

新御手明組

仲間無人ニ付無給勤被 仰付置候処、御蔵元

御窮迫之此節ニ付無給勤被相除候、無人之事ニ候へハ追々勤向

くつろぐ之御沙汰も可有之候間、無御間欠相勤候様支配下之者共江

懇ニ可被申付候

○禁恣奉加

ほしいままに奉加（勸進に応じて神仏へ寄進）することを禁止

寺社奉行中

牌寺之事ニ檀下之奉加氏神之為ニ氏子へ之奉加疫神

送りに定れる町々の奉加の類ハ元方御制禁之外ニ而、又故ある

寺社柄願ニよつてハ事ニ依而ハ奉加權化御免之事も有之候処
近年僧山伏彼を唱是を申立伺もなく恣に奉加權化致
者多候由、是等之不届各油断ハ有之ましく候得共往々
相聞候付申達置候

右之通ニ認置候処、上小松村大光院寺建替ニ付而不届之
權化相聞此節を時と可申事ニ付、寛政七年十月左之通
役所ニ而相触 但寺社奉行ハ我々直々相達候事

覺

寺社奉行中

一 神社仏閣寺院等建立ニ付而相對權化と唱、奉加帳を廻し
或戸々に立寄權化寄附為致候も多有之由、四民之衰御取直
之此節ニ候得者托鉢ハ各別相對といへとも、五七年之間ハ權化
致ましく候事

一 前條之通ニ付神社仏閣寺院等焼失或ハ打仆候ハ各別大破
といへとも五七年之間ハ当分之補理を加て可相保候事

但牌寺補理のため檀下のものへ其身帶相應の寄附ハ可為各別候
右之通被仰出候間諸寺院修驗禰宜神主等江無心得違樣屹卜可被申付候

四民一統触

四民の衰を御痛思召夫々被為尽御心御世話被仰出候此節二付而
諸寺院修驗禰宜神主等江別紙之通被仰出候間不心得之寄附
致ましく候事

右之通被仰出候間被得其意組中支配可得屹可被達置候、以上
十月十五日

○為四民立代参

四民のため伊勢参宮の代参を立てる

御国民の安全を被為祈候ため、来早春諸士之内を以御国民
に代つて伊勢参 宮被仰付候間、来春参 宮之宿志
有之ものハ差招可申候、尤代参下向之上家ことに御祓可
被成下候事

但何月何日 宮をかけ候筈其日潔斎拝礼のためしらせ

置候、尤御城門へ注連被為掛候間家々にハしめニ不及候
此事案迄ハいたし候得共無覺束事のミあり妄ニ施かたし
猶考て可也

右之通ニ候処、寛政七年十二月左之通

郡奉行

町奉行

郡割所

御判所持

在々所々

御役屋

先達而四民の衰を御痛 思召御取直の為五七年之間
諸勸化差出間敷旨被 仰出候程の年並ニ付、四民尅統伊勢
参 宮湯殿山参詣等を始其外共ニ右ニ准候義ハ差扣
可申儀勿論之事ニ候と事なく達候事

○堰堤道橋寺普請之願歟拝借并夫食代拝借

等之願定日ヲ以願出さしむる事

各種申請の申請日を限ること

(朱書) 寛政四年二月十六日此二ヶ條申渡但申渡書下ニ出ス

覚

一 堰堤道橋等普請の願あらハ何月何日限可申出事

○是ハ限日ヨリ五日目ニ見分出シ遠在之往来十日ニテ帰五日有テ済口

申渡、夫ハ材木ヲ伐出普請初シテ鋤仕事ニ後レサルト云日積を以定

一 鋤拝借之願者何月何日限可申出事

○是ハ限日ヨリ三日目ニ鋤ヲ渡シ夫ハ鋤ノサキヲカケサスルコト数多ケ

レハ三十日ト見テ持帰柄ヲスケ田畠打返ニ後レサル程ノ日積ヲ以定

一 夫食夫代拝借之願ハ何月何日限可申出事

(朱書) 此ヶ條ハ除之

○是ハ限日ヨリ三日目ニ済口申渡請取ノ間五日有テ帰作立心クバリ後レヌ程ノ日積を以
定

右堰堤道橋ならハ早く村方ニ而遂見分置、鋤并夫食夫代之事も

早々村方遂相談置、向後ハ右日並迄ニ願出へく候、左候ハ、普請之
箇所ハ早速人差出遂見分不後様手当可申付候、鋤夫食夫代
之事も何月何日を例として可借渡候

○是ハ官府ニモ濟口渡之定日ヲ立候ユヘ其期ニ臨テ滞無様備置ヘシ
借渡定日ハ限ノ日ヨリ八日目ヲ以定

(朱書) ○寛政四年二月十六日申渡ニ通左之通

覚

代官所

在々村々堰普請願之儀、是迄ハ追々ニ差出来候处、左候而ハ普請
相後儀も可有之候哉ニ付、以来ハ雪消否村々ハ早速願書差出候様
可被申付候、見分人之儀者右願書差出候日限ハ五日迄差出見分取運
居懸村ハ杣帳為差登候筈ニ候、左候ハ、五日目ニ濟口可申渡候、尤諸村へ
一同ニハ見分も難相成ニ付、上下長井中郡北条郷へ四手位差出筈ニ候

但道橋堤川除普請之儀ハ田植後見分人可差出候

一堰川除普請諸材木雪之内持出、向寄之場所へ積置、夫々へ配り
用候時ハ各別普請之運も宜敷、村々百姓勝手ニも相成候由、其上近年
近村御林伐尽し入山ならてハ材木無之、人夫多分相懸候事ニ候へハ

当年方ハ雪の内ニ村々普請場向寄を以、手ノ子入山或寺泉・萩生野川入川西之儀ハ伊佐沢・漆山・宮内辺ニ而諸材木元伐并持届人足之儀ハ村々方半分差出、半分ハ御入料を以取量、追而普請之節其村々の定法水下出人足割合を以可被成下候、且又右諸材木取調ハ於郡割所年々の目録を以取調中勘差出筈ニ候間其節元伐可申付候

右之通村々へ可被申渡候事

郡割所

近年在々堰川除普請諸材木近村之御林伐尽し、入山ならて無之、人夫多分相懸り年々の様御入料弥増村々百姓も甚相泥事ニ候、依之当年方ハ先年之通雪之内其村々普請向寄之場所へ溜材木いたし置候へハ各別普請の運も宜敷百姓も勝手ニ相成候付手ノ子高嶺寺泉萩生野川入川西之儀ハ伊佐沢漆山宮内辺入山ニ而元伐いたし、雪船を以其村々普請場向寄江積置相用申筈ニ候、尤元伐并持届人足之儀者一見入料之半分村方、半分ハ御入料を以取量、追々普請之節其村々水下出人足割合を以被成下筈ニ付右諸材木是迄年々目録を以中勘取調早々可申出事

一右諸材木元伐人足并持届人足共二堰々一ヶ所一ヶ所切二夫積中勘
可申出候

但杭之儀皆以割杭二而可然候

二月

覺

御代官所

在々へ為御惠年々千具餘の鋤御借付二相成来候処、時節相後御借付二
相成候上、鍛冶屋相頼鋤の先懸等二日数相懸、百姓の手二候へハ田畠
打候間ニ合兼、面々泥ニ相成候様相聞、以来田畠耕候時節相除候へハ
御惠之誼も無之候、依之当年之儀ハ閏二月一日迄ニ在々拝借願書取揃
同五日迄御作事屋へ申出候儀如前々被相量候ハ、同月十日切御代官所へ
不残御借付鋤相渡候様御作事屋へも被仰付置候間、御惠行届候様可
被取量旨被仰付候事

但来年方ハ二月十日切ニ拝借願書取揃同十五日切御代官所江

鋤相渡候様是又御作事屋へも被仰付候事

二月

在々へ御借付鋤小国御鍛冶屋方当二月切ニ御作事屋入被仰付置候間

閏二月十日迄千具余鋤御代官所へ相渡候様如前々可被相量候
尤此段御代官所江も被仰付置候間引合之上可被相量候事

但来年方ハ二月十五日迄ニ御作事屋入ニ小国御鍛冶屋へも被仰
付候間同月十七日迄ニ御代官所へ可被相渡候

二月

○再置郷村出役

郷村出役を再び置くこと

○此郷村出役寛政四年八月

廿八日被仰付別ニ留あれハ爰ニ略ス

百姓の衰を不便に思召、御撫育のため各江三ヶ年郷村出役
被仰付候間、孝悌を教へ力田を勧め耕作の仕付取収

樹芸并生産の事ニ至迄懇ニ世話し遣し、随而奢を禁

惰農遊民をいましめ百姓取育候様被仰出候事

但御擬之儀者年々金四両宛被下賄ハ其村々ニおゐて

切手払之事

右人頭ノコト一扱三人ツ、十二人小国一人、十三人ニ而も行届カ
タキコトナカラ此通ナラハ大抵ニモ届可申候、扱只ニ其員ヲ備ヘ

候マテニテ其人其人ニ無之候而ハ徒ナルコトニ候ヘハ先相応之者一扱ニ
二人ツ、八人ハカリ仰付ラレ候テ可然歟存候、小国中津川も有之候ヘ共
遠在質朴ノ俗ニ候ヘハ追テノ御沙汰ニ而も可然候

右人柄広く書上をも被仰付御撰勿論ノコトニ候

但相応ニモアルヘキト承候モノ参考ノタメ記置

高橋郷八

・△山田要人

成田弥四郎

池田又三郎

○長孝左衛門

楡井太兵衛

小森沢仁左衛門

売間登理

登坂与一左衛門

△棚橋宇右衛門

唐沢十左衛門

柿崎舎人

△石井次郎右衛門・△庄田甚五右衛門

大井田権右衛門・△安部逸学

御中之間

同

同

同

・△神保伊左衛門

・△横田新兵衛

△中津川信右衛門・△黒沢清兵衛

○肝煎長百姓組頭免許

肝煎・長百姓・組頭のこと、長百姓・組頭について今後は入札あるいは書上（上申書）を取り上げて吟味して選任すること

在役中苗字帯刀御免

肝煎共

勤る中袴羽織御免

長百姓共

右同

組頭共

（行間朱書）

此内肝煎苗字帯刀之事ハ寛政三年八月廿一日寸納濟口と一同
覚書ニ書込申渡ス 但長百姓組頭共袴羽織御免の事ハ追而時
を以申渡候つもり先此節ハ全延引之事但此ヶ條下の寸納定る
と一同ニ申渡候間下の案ニくわし

近年百姓之衰沙汰の限ニ候、肝煎ハ百姓共のために胸をこがし
肝を煎身に受て引立候役柄、いふまでもなく長百姓ハ其村の
おとなとして物教世話し遣るべきもの、組頭ハ預る組子を世話
するもの各身に引受取そだてて目出度其村をさかへしむ

へき役儀なれハ、弥其甲斐ありて百姓共の立行候様心を尽し
力を添て世話し遣へく候、仍而此度改而右之通御免被下候事

但長百姓ハ千石高之村ニ其人柄を以三人計も可立置、尤

長百姓組頭共ニ其名前代官所へ可書出置候

朱書

○此ヶ條五月廿二日付伺候処此通たるへき旨御下知下る、外ニ百姓共の

席高多きを以上とすへきの事も奉伺候処其通御下知相済

但此百姓共席の事寛政三年八月廿一日寸納済口申渡書江

書込申渡之

○右長百姓・組頭役儀公方申付之事寛政三年八月中ニハ不申渡差置

同六年五月左之通代官中江相達、但尚又 君上へ遂御沙汰候上也

覚

代官中

村々組頭ハ既ニ頭の名何れハ預る組子を取そたて大肝煎を助て

貢物の世話まめやかなるへく、長百姓ハ村のおとなにて物の教

を司り、又貢物の世話までもまめやかなるへき役名ニ候処、村切の

相談ニ而立来候故其撰疎く其役の甲斐なきも有之由、小前

のため惜敷事ニ候条、自今以後入札或ハ書上を取上、猶能遂吟味

組頭・長百姓共ニ頓肝煎ニも代へきほとの人柄を相撰役名のいた

つらならさるもの共を其役場におゐて可被申付候、組頭ハ其村

ニ而役料も出置候由、外ニ勤中苗字可被差免、衣服御免ハ肝煎同様

たるへく候、長百姓へも勤中苗字被差免、衣服御免共ニ右同断、組頭

長百姓共ニ村方ニおゐてハ堰普請之外諸人足之義一式差免

候様可被申付候

但組頭ハ其村一兩人ニ過へからず、長百姓ハ五百石ニ二人、千石ニ

三人、二千石ニ四人なといふことく村高其相応も可有之候へハ

能程を以可被申付候

寛政六 五月

右之通相達候処、同年八月十六日十七日十八日代官中量を以

銘々代官所へ召出申付候由、右達書并演説手扣等有之

委細ハ諸郷組頭長百姓申渡候始終之留_付印袋入にして

有之故略之

○収納定日而貢

小夫銀（こぶぎん）は村に來た役人の費用で村負担のため、村に役人を送らないようにしているが、村からの年貢寸納（分割納）が遅れば役人を送ることになる、十一月皆済のところ本納米銀は十二月二十五日皆済、その余は八月から翌年二月まで寸納（分割）とするのでその日を定めて願ひ出ること（書式あり）。題名は「収納日を定め而して貢ぐ」？

肝煎

長百姓

組頭

小夫銀之費ニ百姓共泥候ハ彼口此品の取立とて人多く

村方江下り候故と相聞、向後村方江人多く不差下様被

仰出候付、可成丈向後ハ人不差下候、然といへとも村方納の期ニ

おくれ候時ハ 上の御差支よりおのづから催促として人も差下

候付、百姓共の上ニも寸納を急度たかへぬ様ニ可致候、是迄十一月

皆済之御定ニ候処、向後御本納米銀ハ十二月廿五日限皆済ニ

可被仰付候、其餘之納物ハ年の八月方翌年二月迄の弛可

被仰付候付、年々八月を翌年二月迄之内其村勝手の熟談
を以寸納定日を可願出候、其上を以其村向後の寸納可被
相定候事

一寸納の立方村々の勝手勝手によつて一樣ニハ成ましく候
譬米ならハいつ刈入いつ拵いつの頃の納ニハ揃へく、金銭ならハ
何品かいつ代ニなり何のくほりに何時の納にハおくれぬと云
心くほり日つもりもあるへし、斯のことく一村懇ニ熟談せし
めハ 上の御差支ニもならず、扨村方の勝手なるへき程よき
定かたもあるへく候、右之通定置候時ハ己々か心くほりも行届
セハしからぬ内ニいつか皆済ニ至りて重荷をおろしたるたとへ
のことくゆつたりとしたる安堵ニも至へく候能々懇ニ可致
熟談候

一 右寸納定日願之書法左之通り

寸納定日奉願候事

八月何日方何日迄

一 渴米何ほと

一 何 何ほと

九月何日方何日迄

一何口米何ほと

一何口金何ほと

一何口銀何ほと

十月何日方何日迄

一

一

十一月

一

一

十二月何日方廿五日迄

一

一

正月

一

一

二月

一
――

一
――

右寸納定日を以、上納仕度奉存候、且定日上納
の毎度小前銘々御手形頂戴可仕義御座候処、紛失
之恐御座候付、毎度肝煎・長百姓・組頭之内小前上納
帳持参可奉差上候間、右を以御取立上納済右帳
奥江御小印被成下度奉存候、右帳面を肝煎手許へ
納置追而一紙目録差上候節之御見済ニ仕度存候
右旁総村百姓相談相熟奉願候上者向後永々
寸納之通急度上納可仕候右奉願候通ニ為 仰付
於被成下ハ難有仕合可奉存候、以上

年号月日

何村組頭

――

同村長百姓

――

同村肝煎

――

御代官所

右之通願出候ハ、其上を以寸納可被仰付候事

一諸給人の事ハ纔の收納を以取続ものニ候ヘハ、給人江の収方ハ

弥以是迄之通急度年皆済可致候事

黒井評

○村の出物六月の撰芋カイコナトニテノ出物アリ七月瓜の出ルの頃
アリ願ニ仍而ハ此月も寸納ニ入ヘシ

黒井評

給人半知差向モ寸納アルヘシ、然トモ差向ニ違アルコトモアリ又ハ
遅速モアレハ前の寸納とハ一同ニシカタシ、仍給人エハ年皆
済の筈ナレハ十二月ノ寸納ヲ申付ヘシ

黒井評

九月ヨリ上納月ナレトモ渴米渡アレハ八月ヨリノ寸納ニナケレハ
不叶コトナリ

(朱書)

○寛政三年八月廿一日申渡ス肝煎苗字帯刀并持高次第席順并寸納
願済口并諸給人江の年貢納方申渡書左之通

覺

一 肝煎ハ百姓のために肝を煎、心を尽して取そたつるもの
其村におゐてハ重き役柄ニ候ゆへ今度苗字帯刀御免
被仰出候事

一 平百姓共一村一郷の交にハ年長を以上とする事勿論
の事ニ候、何その事ニ而役所役所地頭地頭へ出候時又者
名前書出候節ハ田地高の多少を以上とすべく、尤列座
の次第も高の多少ニしたかふへき事

一 今度村々の願ニよつて寸納期月期日望ニまかせて
被相定候事

一寸納既相定候上ハ向後村々へ取立人不差下候間期月
期日無相違可相納候事

一 諸給人への年貢ハ是迄の通十二月限可致皆済候事

寛政三年

八月廿一日

(朱書)

右者郷村頭取荏戸六郎兵衛量八月廿一日同廿二日諸村肝煎組頭長百姓

代官所へ召出其扱代官を以申渡之

但本書寸納済の定被 仰出候趣意并村々々願の趣并諸村

肝煎苗字申出候面付之儀ハ莅戸六郎兵衛并代官所ニ留有之

○郷村御取立物口々取合而評判達書之案

村からの取立物（負担）や役人が村に來たときの負担が多く村が困っている、口を少なくして覚えやすく納めやすくして取立ることも出来るはず

（朱書）寛政三年四月十日御用懸之面々へ達候様役所へ相渡

郷村御取立物口々多けれハ夫たけ事繁く、殊ニ彼は二付而ハ

おのつから御役筋の下り多く郷村の泥ニ有之由、其上肝煎小前

事多ニ而煩しく取立の役場役場も口々多けれハ苦惱且紛

敷有之由ニ付、彼は取合口少にして覚えやすく納やすく

取立易き仕方も可有之候付、其取合方評判承度存候

当時ハ苦惱緬道の事ニ候へ共永々事簡ニ成行候時ハおのつから

郷村御恵ニも可相成候付遂評判可被御申聞候、尤御用懸ニ無之共
功者の面々あらハ被遂相談候事尤の事ニ存候

○馬ヲ附益ス策文

馬を附益（ふや）す方策を考へること、雪国でも牧場をつくるなどできないか

（朱書）寛政三年四月十一日御厩頭役所へ呼出為相達候

御厩方

御郡中馬不足ニ付、何卒馬を附益し候仕方有之度事ニ候
地子多附益候仕方或雪国なから牧を立候仕方なとも可
有之歟、其外事馴候面々の上ニハ何れ附益候思慮も浮
可申儀、摠而御厩方中追而遂評判仕様書ニして可被差出候
老功事馴候ものニ付山下歛右衛門江も存寄申出候様可被相達候
但一策ニ不相片付、斯もあるへく、如此の仕方も可有之忤
思慮ニ浮次第何策も可被書出候

一右之趣ハ御中間共并馬苦勞共へも相達為書出可被申候

○右之外功者之者ニ付佐藤文四郎へも申達為書出候事

○中殿様兼而被成 御意候聖慮追而御沙汰ノタメ此処へ記

ヲク左之通

一米沢ニ而ハ子馬母駄を早く放つゆへ子馬の氣立よろ

しからず、善馬も生し兼候由、三春辺ハ何時頃迄母駄に

附置候哉承度候、三春の例ニ改られ候ハ、後年御用立馬も

出来可申哉

一赤湯馬市之節走をかけ候事被相止度もの二候、大二駒の

害なるもの二候

○正反物丈尺

反物の丈尺（長さ）不足のものがあり、これを正すため店の印を反物の両端に押すこと、また細工物も最初だけ良く、その後手抜き品の品となることのないようにする

○寛政三年十一月廿一日触出ス

町奉行

郡奉行中

御国仕入の反物間々丈尺不足のもの有之由、絹紬布木綿共ニ大工か年ニ而長三丈四尺か御定ニ候へハ急度遂吟味、長幅豊にして可致売買候、仍而向後ハ両端江店印の小印を押

其店の品無見違様可致候、旅出の品尤以同断の事

但染物ハ小印の見分り候様印の処を染残スへく候、織縞紋織の類小印見分かたきものニ至而ハ小印紙を張而

印に致へく候、尤右商売店々の印鑑改所へ可出置候

一当時仕入置候内丈尺不足のも有之ハ来年三月迄ニ可売払候

若売残有之ハ四月五日達改所可請差図候

右之通商人共へ可被申付候

○此外総而の仕入諸細工もの初ハ相応ニシテ売弘漸々行ハル、

ト云ニ至而ハ手ヲヌクト云コトヲ專ニシテ人ヲ欺候ユへ、後々ハスタレテ買取候モノ無之ヨシ薄俗恥へキコトニ候、然ラハ彼モ是モ一同ニ戒へキコトニ候ヘトモ、凡ノコト物数多ク彼モ是モト触

達候へハ行ハレサルモノニ付、追而物ニ向テ戒候カタ然へキト先ツ
此一事ヲノミ相記候

○改所ニ達候処商人共へ尋候得者商ノ道広ク別テ難有由

答書差出候、且役所ノ存寄ニ織出スモノ共へモ触達へキ
ヨシ申候得共、ヤカマシク一統触ニモ及マシク候、此達アラハ
人々聞付可申仕入スルモノ油断も致マシク候

○前ヶ條ノ通ニハ候得共触知らせ候方可然トおもひ加へ候付
左之通

諸士頭々江

右触書一通添て

今度別紙之通被 仰出候、織機ハ女工の第一にて輕き

諸士并又者之妻女ハ此業專ニいとなむへく候へハ可被為知
置候

右之通諸士江も為触知候事

○右之通被 仰出候趣改所へ達之

○減町役夫

町に課されている役夫（えきふ・人足）や負担が多い、例えば御入水奉行は、あくた見人足など九百六十二人に御入水の雪蓋費用なども負担し、町が疲弊しており、これら負担軽減の方法

（朱書）寛政三年四月十一日中条宅へ

町奉行呼出達之

○寛政二年正月ヨリ十二月マテ御入水奉行ノ手ニツカハルル町夫定法一日

一人ツツノ芥見人足三百五十四人外ニ一ヶ年不時ニツカハルル人足六百八
人分九百六十二人、右ノ外御入水雪蓋入料年々六町ヨリ出ス高

二十一貫五百文、但此雪蓋スル人足ハ此二十一貫五百文ノ内ニテ雇ニ

モスルカ町ヨリハ不出扱右取仕廻ノ人足ハ六町ヨリ出タス前ニ記ス六百八人の内なり且
又雪蓋取仕廻候上輕杭木瓜簀トモニ皆御入水奉行へ取納置、町家

へハ不返ヨシ、此一ヶ所スラ此ノ如シ、其ツカレ知ヘシ、右御入水雪蓋ノコトハ

既已過テ当冬ノコトナレハ追テ其沙汰モ有ヘシ、先町奉行中へ左ノ

一通ヲ渡シテ町役トモニ評判イタサセ候タメ左ノ通

町奉行中

町家衰候上役夫二つかハれ候の多く泥候由、近年諸役所事繁

く成来候間左も可有之候、向後多く不使様専遂評判候へハ以往ハ
おのつから其数も減へく候、町役人共の心遣も疎遠候様二聞へ

候、近くハ町奉行所へ出候働夫二ても知候事二候、何の所へ勤候二も

朝遅く出昼早く帰候故一人前の所を二人三人乃至四人懸り候程の

事も可有之候、其役場ニてハ事多く又役場より賃錢出して召仕

ふ事二無之故おのつから深く心のつかざるも余儀なく候、然らハ

惣町役のもの共打寄り遂評判、向後ハ働夫の内二世話人

をたて先立て働かすとか、又ハ多人数出すへき所へハ町役人

ミつから出て差図するとか、何れ其仲間の評判にハ多く費

ましき致方もあるへく候、雇ヒハおのつから町のもの雇ハれニて

可有之候、つまりハ己己か出錢なからけふの背を休むるにあす

の出錢を不心付も亦遁なき人情二候、彼はおもひあひ能々遂

評判候様十六町町役人共へ可被申含、尤被御願置町人共の事二

候へハ懇二世話し遣り可被申候事

○御兵具錢借渡武器用意ニ限ル

藩が貸す兵具錢は、これまで理由を問わなかったが、今後は理由を明確にして貸す

(朱書) 寛政三年六月三日申渡之

御兵具頭

御兵具錢之事是迄ハ不問入用之品申立次第借渡候所、向後ハ武器用意手入ニ限て拝借被 仰付候間、何の用意何の手入のためとの申立を以可借渡、証文ニも何用意何手入の為 拝借之趣為書可申候事

○御兵具錢ノ行廻救窺考ニ留ヲクニツキ爰ニ略ス

(朱書)

○此ヶ条此通たるへき旨五月廿二日御下知下る外ニ損し兵具又ハ端物等多分御蔵ニ有之ニ付修復のため望のものニハ可被下由の御沙汰あり

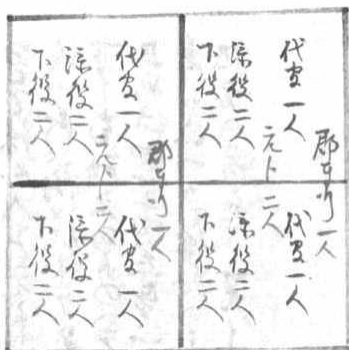
改代官所之制

これまで代官所は各人が個室で仕事をし、おのずから不廉姦曲の気持ちも生じて民心が離れることもあったので、大部屋に列位させての仕事ぶりとする、郡奉行二人は各百二十ヶ村を担当、代官四人は各五十六ヶ村を担当する

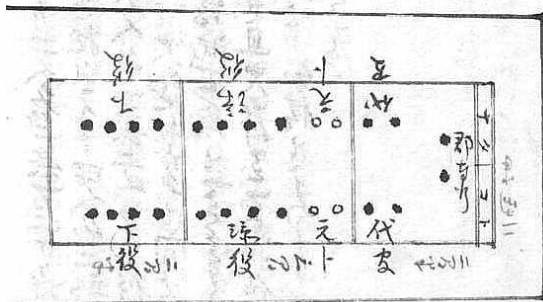
代官所是迄の事沙汰の限にて民心の離候も大かた是かためと聞へ候へハ去姦進能候か此時の急と存候、且官員多よりおのつから委任薄候へハ其員も被相省度事ニ存候、假令相応の人か揃候共是迄の如く各部屋々々を持其部屋々々ニ而の取量ニ候時ハ、不人知所ゆへおのつから不廉姦曲の氣も生し候ニ付、大席列位至公の取扱ニいたさせ、扱御郡二百二十六ヶ村を四部二分、各己か扱を定而心一盃器量一盃ニ相勤させ申度事ニ存候、去れハ郡奉行二人各二部百二十ヶ村をとり、代官四人各一部五十六ヶ村ツ、を扱ひ、元々四人各二部ツ、の金銭出入を元々し、添役八人各一部二人ツ、下役八人同断ニ付属して勤候ハ、是にて大概其員も間ニ合

可申、尤巧者のものへ尋候上ハ猶増減取捨も可有御座候
只如此心一盃器量一盃二扱ハせ且大席至公の列位ニ
立候ハ、いつか廉恥の取扱ニも至可申出情もよろしく、尤
扱方の善悪も著く可相見事ニ存候

大席配当之図



大席列位之図



金銀出入一円帳之新組 量入為出

藩財政の新規収支一覽の作成、量入為出（入るをはかりて、出ずるを為す・りようにゆういしゅつ）は収入を計算して、その後には支出を決めることの意味。

米方の事ハ御本納米一万七千七百四十六石四斗餘、軒米千二百八十

五石二斗餘、諸職人役ニ出ス米并同濟下年徳米共ニ五百七石

五斗餘、往古六斗の米を永楽錢百文ツ、ニ而御買上ニ成来

其分一万五百七十七石六斗餘、扨諸士相定拝借米とも返米并

金銀拝借を米ニ而返納申上候口々二百九十三石九斗餘、右五口

ニ相当一俵ニ四合ツ、の下敷米彼是取合三万五百六十一石

四斗餘有之、是を以米方の払ニ組合候様御続方可被相立候

所是ニ而不引足、無抛も御家中諸士へ被成下知行御扶持之内半

物成御借上被 仰出其高一万二千二十八石四斗餘被召上、是ニ而

米方の御払ニハ間に合余計も有之ほとに候所、金銀御払の高

多くして其塞方に差支、中古方蔵々升目を強く取候て余計

之入ニ成来候分二千五百石俵ニして五千五百五十五俵餘有

之都合之高四万三千九百四十二石餘、是を以米の御払ニ差引候へハ一万三千五石八斗餘他邦出し御払米ニ相成、酒田福島越後其所々の直段不同ハ有之候へ共夫たけの金に相成候

但此御払代金ハ金方の御出方として末ニ出ス

○金銀入

一七千三十七兩二分永二十七文

御本納銀

一三百二兩永百十八文

奉公人開并明屋敷年貢

一千二百二十六兩二分永百五十六文

定夫銀年賦濟

一千二百七十四兩一分永八十三文

軒銀

一六千八百九兩三分永二百二十三文

御払米代粳大豆御払代共

一二百五十八兩二分永九十九文

御郡中山林年貢追鳥雉子代

東西流木役温泉役共

一四千八百八十二兩三分永百八十文

在町売買出入役錢

一八十九兩一分永三十六文

鮎貝桑払代

一十九兩一分永七文

御開作村方渡米払代

一二十五兩二分永四十二文

右同断運上錢

一千七百六十三兩一分

蠟払代

一四千百六十七兩三分永百九十八文

一百七十八兩二分永七十一文

青そ代并紅花代小払代共
在々普請夫代ニ可払分高物
成懸錢方引取可申分

一四百十八兩二分永百八十文

一二百八十六兩永百二文

居役金償金共
御借物別取立諸士定法
拝借年賦済

一千九百四十六兩三分永百二十四文

諸役場払物代大細の元方
御林方出増三十兩共ニ

一二百八十兩

一二千六百六十五兩永二十一文

一百三十二兩三分二朱

一六十八兩

一六百四十二兩三分永百八文

一百六十四兩一分永百十一文

一五兩永七十六文

一二十六兩三分永三十六文

一五十兩二分永百五文

海道馬代返納
生育金
左下一人ニ付六百文済
在々拝借返納元利
救郷錢三十年賦
北沢量御借付錢
御家中御恵拝借二十年賦

一百兩

糶藏量御借付錢

一百二十兩

御預所限御元金

ベ三万五千九百四十三兩永二百二十八文

右ヲ以出方

一三百五十七兩永百四十三文

在々堰川除道橋御普請料

一八百兩

郷中御世話窮民御手当之備但

内五百六十兩役軒繰替用捨

明元懸銀用捨共ニ

一四百八拾兩

窮民濟下諸奉公人下り又ハ村々

何かあつて年貢御捨被下事ある

節の見込中勘

一六百三十兩

備糶買上料但六千俵五合挽

ニメ尅俵十二匁六分直ニメ

右ハ二万三千俵餘ツ、備置候様被 仰付置候へ共漸々の御備並々の荒歳

の救ニハ間ニ合候程有之御続方不足旁ニ付右之通減して備候つもり

一二百三十兩

七恵料

一百三十四兩

軍用備

一五十兩

文備

一同

武備

一百三十二兩三分二朱

海道馬代

一三千七百四十八兩二分

江戸御続料

一九百五十七兩三分

御発駕御入料千三百兩二分御下

一五百七十七兩

御入料六百十四兩三分平均ニメ

御供方御擬八百三十六兩三分

御留守処御擬三百十七兩餘

一四百四兩三分

平均ニメ

一八百三十八兩三分

江戸定府交替御擬

火之御役御入料千百四十七兩

二分駿州様御門御受取金五百

一九百六十兩二分

三十兩平均ニメ

一六百七兩

米沢御擬諸濱勤共ニ

一一万二千二百九十三兩二分

京都御入料御茶料共ニ

諸口御借受金御返濟御借返

差引残如上

此理

一四千五百五十四兩二朱 年賦金元利

一三千九百三十三兩一分 元入御返済

一三千八百六兩一分二朱 利息払中勘



一二千兩 世子江戸御統料

一千兩 御備金

一二千五百二十一兩一分 不時金

一十六兩二分永二百三十四文 神料

一八十九兩二分 御膳料御召料半年分

一三千百八十四兩三分永二百十三文 御方々様御仕切金

一四十五兩三分永百七十一文 川押休地一作引共二千

五百石分中勘二メ

一千七百八十五兩一分永百九十四文 御買米代

一二百五十五兩 木実代銀

一千七百五十八兩一分永百九十四文 青苧代銀

一七十兩三分永七十五文 御買綿代

一三十兩永百九十四文

花手銀

一十二兩三分

莫蔭花袋前銀

一三百二十五兩三分永六十二文

御堂渡諸品代御藏出知行

在々普請諸職人作料等取合

一七十五兩一分

江戸御預所入料

一百九十八兩三分

三谷野挽加藤小川へ被下知行金

一千二百九十八兩永百九十一文

東廻運賃宿々濱々料共二

一六百七十二兩二分永百六十四文

西廻運賃雜用米共二

一二百九兩一分永九十九文

福島御払米運賃

一九百六十兩一分永百六十二文

御作事屋御入料

一千七十八兩永四十八文

御日小屋御入料

一三百六十五兩三分

蠟打立料雜用共

一三十兩

真綿搗代御留守居御手当金共

一八百四十八兩永二百三十八文

鉄買代小国分共二赤湯馬代御用

殘代薪代青苧駄賃共二

一五百八十二兩三分永四十六文

寄合払 御堂御入料濱々御借付

物代旅人賄代越後御肴買代等

都而小細之口々

ベ 四万三千三百十七兩二分永百三十文 出

右を入方ニ差引候へ者左之通年々の御不足

一七千三百七十四兩一分永百五十二文 御不足金

赤湯馬市旅馬を禁

赤湯の馬市に藩外の馬（旅馬）を持つてくることの禁止

（朱書） 寛政三年八月十七日申渡ス

御厩頭

赤湯へ馬市江差出候三歳駒他邦馬持立御停止被 仰出候間

向後ハ御国産之内を撰て持立へく候事

右之通被 仰出候間、馬持馬口勞共へ馬付置候、且又一馬代十

七八兩留馬代六七兩のつもりを以御買上可被成候、此段も心得

のため兼而可為知置候

馬子附益し

馬不足の対処として、子馬繁殖のため牝牡の馬を放牧するなど

(朱書) 寛政四年閏二月朔日申渡

代官中

在々馬不足ニ而田畠の養不行届候ニ付、馬子多さかえ候事を可心懸候事

一馬立置候もの向後ハ牝牡打込に野放致へく候、可放土地なき村方ハ時におくれす父付いたすへき事

但場所広くハ二三ヶ村一同放込へく候

一拝借父駒代之義野放いたす村方ハ利息御免可被成候、可放土地

なき村方ハ其馬の種に子三疋を生候にハ其馬主ヘ利息之内

半分五疋を生候にハ利息皆正金を以御返可被下候

(朱書) 追而評判之上此ヶ條除く

一父駒二三ヶ村寄合ニメ立置候も可有之候、假令輪番ニメ立置候
とも野放の時節ハ寄合の村方申合村かハリにして放込へき事
一父駒何事かありて父付成かたき事あらハ寄合ニ無之村
たり共所望ニよつてハ異議なく早速借へき事
右之通百姓共へ可申付候

御厩頭

駒調

今度別紙之通百姓共へ申付置候間、弥馬子のさかえ候様
廻村の毎度猶懇ニ可申付候

(尤利息御免并利息御返のため)

馬子出生の事無間違様に■■相済候上可書出候事

(朱書) 前同断除之

○博奕刑

博奕刑死刑を弛組立上候様 屋形様

中殿様ヨリ我等ト丸山平六へ仰付ラレ候

ニツキ組立上げ改革刑

(朱書) 寛政三年十月十四日御取上ル

博奕改革刑

(朱書) 七年 主人願ニヨツテハ

其身欠所定価屋渡 十年全勤テ御免 宮内村博知

妻子定価屋渡 五年全勤テ(同) 御免 宿人

田畠家屋鋪家財欠所 (朱書) 三年

主人願ニヨツテハ

其身欠所定価屋渡 七年全勤テ御免 宮内村

其身ノ手道具欠所 (朱書) 五年

妻子田畠家屋敷家財無御構

博徒

過料三十目 宮内村肝煎

同 三十目 同 組頭

同村居住忌懸り

同 三十目 親類

同 三十目 宿人ノ両隣向三軒

付札

別紙朱書ニ認候通肝煎検断三十目ニメ組頭一類近隣と同様可然との中殿様思召御尤御座候へハ此五十目の所を三十目と直し可然候事
但屋形様言上其通御同意之上之事

付札

寛政七年十一月博奕御呵定価屋渡年限御弛左之通
一宿人筒取十年の所七年
一右妻子五年の所三年
一平博徒七年の所五年
右之通被 仰出ニ付総紙へ朱字ニて直し置

右去年か入牢致居候宮内村博知打近日御裁許被 仰付、是を改革
刑の始ニ被遊可然存候

一定価屋渡是迄ハ生涯の奉公ニ御座候故、何とかして一類へ倚申度
色々の作り病いたし、乱心の真似し、大病の真似して養生とて

親類へ帰候而、欠所もの取候もの致方なきものニ御座候、生涯の奉公と存候へハ退屈仕へく尤の事ニ御座候、仍向後年限御定御座候時ハ励て勤遂可申ニ付、右之通御定可然と存候

但病氣申立又ハ不勤のものも候ハ、年限相増候定ニ仕可申候

一 簡取博徒ハ宿人同刑たるへく候

一 是迄ハ博徒の向三軒兩隣過料御取上之所、向後ハ宿人の近隣計より被召上可然存候

一 是迄ハ親族之過料無之候所、近隣ニさへ過料有之处、同村居住の親族ハなくて不叶義理ニ付、此度ハ親族へも過料被仰付度存候

但親族ハ宿人簡取平博徒の差別なし

一 諸士ニ宿人有之候ハ、追払妻子ハ一類御預、家屋敷家財不殘欠所、十年過て帰参御免 但忌懸一類自分遠慮

一 簡取ならハ右同断 但右同断

一 平博徒ならハ其身困入跡無御構 七年過て出牢御免

但右同断

一 四民共ニ御免後再犯のものハ一通の吟味白状之上、早速死刑

付札

再犯のものハ此ケ條之通死刑之筈ニ候所、寛政十一年二月
六日御裁許、千坂家来富樫半左衛門、赤湯村弥兵衛再犯の所、宿人
筒取と同様の刑ニ御下知済、尤再犯死刑のケ條マテ相除事ニ
候へ共博奕ニ無地死刑を被相除と申時ハ又々御改革同様ニ付其
段ハ御下之上染々御評判可被成旨被 仰出候ニ付、右二人ハ右六日御裁
許申渡候

但宿人筒取同様とハ御下知有之候へ共、其家族御呵ハ同様ニして
向三軒両隣の過料御差上ハ相除候事

○此節朝典御聞合一通あり御用箱へ入置

右御裁許畢而五七日を経て左之通被 仰出可然存候

(朱書) 此触寛政三年十二月三日達ス

郡奉行

町奉行

博奕の事嚴敷御停止ニ候所、追々犯もの有之、身をそこなひ父

母妻子を泣かせ候義甲斐なき次第二候、向後ハ慥なる証拠迄

ニ及ハす、疑敷聞有之ものハ召捕吟味之上越度ニ可被 仰付候

御代々様厳刑を以御停止被 仰出候事、畢竟ハ此思召ニ候条

我が父母妻子ニ厳刑のかゝり候日におもひあハせけふを始ニ急度

可相止候

一 右思召を以死刑迄の御執行ニも被為及候所、命を被為絶候事被為忍

かたく、おのつから御猶予ニも被為至候付、御刑法の義ハ今度御改被

仰出候、畢竟此末ハ疑敷迄をも無殘可召捕ためニ候ヘハ、旁相考急度可相改候

一 肝煎検断組頭ハ元より支配のもの取そたて候役柄ニ候所、常々其行

跡ニ心を不付、疑敷見聞有之候而も見のかし、聞流し、終罪ニ落入らせ

候事不調法の至ニ候、一類ハ不及申近隣住居の交ハ互ニ頼母しく

可有之所、疑敷ニ異見をもくハヘす殊更行跡ニ心を不付、不身持

不存知罷在候義ハ是又同様不調法之至ニ候、若取そたて不行立異

見疎ニて其村其町ニ博奕打出候ハ、各越度可被 仰付候間、可存其旨候

右之通懇ニ可被申含置候

一 右一通を添て諸士寺地へも可相触候、其別紙左之通

別紙之通被仰出候間、家来又ハ門屋借等へ懇ニ申含置候様支

配下組中へ可被相達候

一 右触書差出候即日役目之者を以召捕ニ及ハす頭々差紙ニ而兼而

博奕頭取と相聞候伊藤才助以下十四人町奉行所へ召出遂吟味

白状のものハ改革刑の通裁許し、不及白状ものハ無御構、帰村

申付、扱村役のものへ其席ニ而左之通町奉行急度申渡之

此者博奕打の聞へ有之召出遂吟味候所、不及白状候へ共事在

たる事故明白の御詮議ニ不被相及無御構帰村申付候、此もの疑

敷ものニ付此ものの行跡心を付罷在此末若博奕打たる聞

有之ハ早速可申出候

右御執行ニも被相改候ハ、一先可相心配と存候、尤何の御法被相立候共

法不能独行漸々の弊相破候事ハ知かたき事ニ御座候、餘ハ只御政

教の届と不届と大理の心を用ると不用とに止り候へハ先此通

の御執行ニても可然敷と奉伺候

七惠之一歩

七恵の御取行ひ、此御窮迫のため施かたきにつき、今六月拝借御取立
休被 仰出候内、先年村方へ御借付の生育金三十五年に成り居候を
奉願御休の外ニして差置候ニ付、年々此年賦済の金と御預所
郡奉行所ニ御借付残又ハ済処等有之を取満しへ候て、是を今
年亥年ニ付亥の御元金と名つけて旅勤の諸士への御借付ニして
此利息年二百七八十兩つゝにも成候年より七恵の御施行有之
ため寛政三年十一月十八日左之通役所ニおいて申渡候事

代官所

村方へ御借付生育金年賦当納分年々御金蔵納ニ成来候所
向後ハ御金蔵へ不相納、御預所郡奉行所へ可相渡候

御預所 郡奉行所

此度在々々年賦御取立の生育金代官所取立之分御渡ニ相成
候間、是迄其役場にて引除置候別段金へ取合旅勤の諸士ニ
限り左之通

一五兩限り 式百石取へ御借付

一三兩限り 百石取へ御借付

一二兩限り 百石以下同

右之通利息一割四年賦ニ_レ亥の御元金の銘を以御借付

尤御役筋たり共高押願等不相叶候事

右之通役所済口を以御借付可被取量候、尤六郎兵衛懸ニ付請差図
可被相量候

十一月

右生育金之義ハ、我等御小姓頭勤中 中殿様御代、出生を押返

し候義を深御歎被 思召上、度々御会席有之御評判有之候所、金子

金子ニてハ思召も不相立由の評判ニ而、竹股美作量を以青苧荒畑

起方を以、末々思召被為遂候組立致置候ものニ候へハ、七恵御施有之候

へハおのつから出生養育其外共行届候事ニ付、我等奉願今度右之

通取量候事ニ候、右御元之行廻代官所へ尋候所、代官中答出候ニ付

右書面参考のため左ニ留置

生育金の根元、下長井村々之内青苧畑荒所ニ相成、御役青苧

不足分差立休ニ相成候貫目不少義ニ御座候所、青苧御藏量を以右

荒畑為開発夫代借渡、扱又御取立休ニ相成候青苧貫目ハ追々起

方ニして御取立ニ相成候所、安永七年中又々青苧御藏方申立右起方ニ

相成候貫目臨時の御出方ニ付、右御払代年々青苧御藏へ御渡

一割二歩五厘の利付ニして村方へ借渡、尤常■ニ不相成様

一過々々ニ取立借返し候時ハ十二ヶ年目ニハ六千両餘ニ相成候ニ付、
右を以詰り生育金の御備ニ被遊可然段申立之通相濟、夫より

青苧御藏量を以在々へ借付、尤取立之儀ハ青苧代銀押

置取量来候段ニ承知仕候、右差引青苧御藏へ問合候所、別

紙之通御座候、然所右在々へ借付置候分天明八年方年三步

の利付ニして三十五年賦御取上ニ被 仰付、其節方御代官所量ニ
被 仰付候、御元方并年々御取立上納仕候差引左之通

千百五十五両三分

天明八年

永二貫七百八十文

御借付元

錢十九貫四百文

二十八両

内 永五貫百文八分六リン五毛

当納

錢五百五十五文

二十九両二分

永五貫二百五十五文九分

右利息

錢五百八十二文



千百二十五兩一分

寛政元

永百七十九文一分三リン五毛

残元

錢十八貫八百四十五文

二十八兩

内 永五貫百文八分六リン五毛

当納

錢五百五十五文

三十三兩三分

永十二文八分七リン八毛

右利息

錢五百六十五文



千九十二兩一分

寛政二年

永七十八文二分七リン

残元

錢十八貫二百九十文

二十八兩

内 永五貫百文八分六リン五毛 当納

錢五百五十五文

三十二兩三分

永十九文八分四リン八毛

右利息

錢五百四十九文



千五十九兩

寛政三年

永二百二十七文四分五毛

残元

錢十七貫七百三十五文

二十八兩

内 永五貫百文八分六リン五毛

当納

錢五百五十五文

三十一兩三分

永二十六文八分二リン二毛

右利息

錢五百三十二文



右之通御座候、尤寛政二年迄ハ当納元利共取立御金藏納仕候、以上

十一月

御代官所

鉄砲触并上覧矩共に追廻馬場西星

場ニ被相定候留

矩（のり）の鉄砲は、正月に行われる鉄砲射撃で、稽古は正月七日から三十日までとし、諸組が勝手な場所で行っていたが今後は追廻馬場西の星場にする、藩主が正月に米沢にいる時は上覧鉄砲を行うので矩の鉄砲は行わない、その他鉄砲の次第や記録、塩硝などについて改革案。稽古日やその他について別途条項がある。

○鉄砲触案

鉄砲之事是迄ハ正月七日被 仰出御停止之事も追而触達来

候所、向後ハ正月七日朝方同月卅日夕まで可打事

一諸組矩之鉄砲組々勝手々々の場所ニて為打来候所、向後ハ追廻馬場西ニて可為打候、日次之事ハ是迄横目方差出候日次たるへき事

但上覧有之年次侍組家来鉄砲ハ上覧済候翌日たるへく候

一上覧有之年次矩之鉄砲御免之事是迄の通ニ候事

一上覧之節立之次第書 御前分ハ是迄の通折立其外ハ一式

卷立可差出事

一矩之鉄砲御帳向後ハかさたかに不成様中折紙横折帳片面

十人書たるへし、足輕組之義ハ一年切合冊たるへく、侍組家来の
立も五組合冊たるへき事

但是迄ハ鉄砲不打ものも帳末へ書記候所、向後不及其儀候

右之通被 仰出候間各支配組中へも可被相達候

月日

両奉行名

侍頭中宰配頭中鉄砲組の御仲間年寄中名宛猪苗代五十

人頭へハ役所にて達之

○丸田九左衛門へ右承知達之当時鉄砲大将なれハ也

○御使番へ右同断

○矩之鉄砲之時ハ御殿御借渡ニ付玉葉小屋等掛渡ニも不及事

上覧之時ハ玉葉小屋一小屋も補理可相渡事

○矩の鉄砲といへとも山立場并諸補理事御作事屋量たるへき事

但火鉢并炭等ハ其組々々持参の事

○矩の鉄砲玉返しハ先年馬場ニて為御打被成候時の例たるへき事

○御前被下事前々之通上覧之時也

○上覧の時手柄のものへ被下塩硝明和九年ハ安永三年迄五斤つゝ、廿

目以上ハ片矢ニても十五匁以下ハ双矢のものへ計被下候所、安永五年ハ
改而筒割ニして二斤ハ二十斤迄被下来候所、明春ハ明和九ハ安永

三迄ニ立帰、片矢五斤可被成下十五匁以下ハ片矢ニハ不被成下双矢仕候

ハ、五斤の塩硝可被下由被 仰出候事

但古来煙硝斤目御差略有之ハ参考のため左ニ留置候

一正徳六年 十斤

一享保五年 同

一同十八年 同

一元文二年御省略ニ付半減被 仰出 五斤

一同六年 十斤

一寛保三年 同

一延享二年 同

一同五年 同

一寛延三年 六斤

一宝曆四年 三斤

一明和三年 同

一同七年 十斤

一同九年 五斤

一安永三年 同

一同五年正月卅日改而簡割にして二斤を二十斤までと被

仰出天明中迄如此

一寛政二年 二斤

一此度明和九々安永三迄之通五斤被成下由被 仰出候



○来年正月七日頃出仕居殘申達宰配頭御仲之間年寄并丸田九左衛門

へ左之端書を以達之、外二猪苗代五十人頭へ役所にて達之、外二

作事屋頭へ上覧所補理之義絵図面を以役所にて達之

○右 上覧所絵図 西 印ニして一枚別ニ有之寛政二年上覧

以前之図一枚参考のため 東 印ニして別ニ添置之

諸驛場掛札

馬方人足が酒代や祝儀をねだったり、はたる（催促する）など不届きがあるので、各驛場（宿場）の宿や問屋にこれを禁止する掛札をかける。

諸驛場馬方人足等ゆすり事多有之由二付寛政四年十一月

町奉行代官等へ左之通達之

町奉行中

代官中

御領内の馬方人足等酒手をねたり祝をはたり候不届相聞候、依之宿々問屋へ掛札致置往来のものゝ心得二可被致候、尤左右の村方へ兼而急度申合置無僊忽様可被申付候

掛札案

御心得書

御諸士様方御荷物・商人荷物共二不心得の馬方人足等万一御荷物
の軽重を申、御酒手御祝など御願申候とも、必以被成下ましく候、若

途中等にて強而相願候ハ、無御遠慮被成下、先の宿問屋へ御断御取返可被成下候、左右の宿問屋互ニ兼而申合置候へハ聊鈍忽不申上候、以上

十一月

問屋 誰某

赤湯馬市を御城下馬口労町へ移す

赤湯で開催されていた馬市を費用の節約などから、城下の馬口労町へ移す。

○赤湯馬市御取立ハ定勝公御代正保二年也

一右言上之旨趣

赤湯村へ馬市被相立、御献上馬御撰被成来候事ハ、場所柄旅馬口労多入来候ためニても可有之歟、於于今ハ御国産を以御献上之事ニ候へハ赤湯村ニ可限事ニも無之、先以遠方之儀殊各宿屋付の事ニ候へハ、御横目始諸役筋の費用も多相懸、乍少分御入料も相懸候儀、其

上馬事ハ人々見物も好候ものにて諸士多人数西下致見物候へハ、場所柄自然と面々之上ニいたつらなる費用多有之儀ニ付、来年ハ御城

下馬口勞町二市を立、為相撰可然致評判候、万其節可申上候所時
機を以相発申度存候付而予奉伺候

覺

御使番中

御廐頭中

駒調中

是迄赤湯村二馬市被相立御献上馬被相撰候所、今年方ハ御城下馬
口勞町へ被相移筈二候間、可被得其意、随而各出勤宿をはしめ其外
何かれ始終之儀遂評判可被申出候

町奉行中

是迄赤湯村二馬市被相立御献上馬被相撰候所、今年方ハ御城下馬
口勞町へ被相移筈二候、此旨馬口勞町へ承知可被相達候

郡割所

是迄赤湯村二馬市被相立御献上馬被相撰候所、今年方ハ御城下馬
口勞町へ馬市被相移筈二候、依之馬場之普請時二不後様可致候

代官中

是迄赤湯村二馬市被相立御献上馬被相撰候所、今年方ハ御城下馬

口勞町へ被相移筈ニ候、此旨赤湯村へ承知可被達置候
右ハ我等量を以役所ニおゐて為相達候運のため寛政七年十二
月中役所へ申渡之八年七月之市方馬口勞町ニ相成候事

蒔戸善政「総紕」解説

2020 年 10 月 30 日

米沢古文書研究会

監修 山王堂初雄

解説 高橋育子，高橋敬一，中村善治